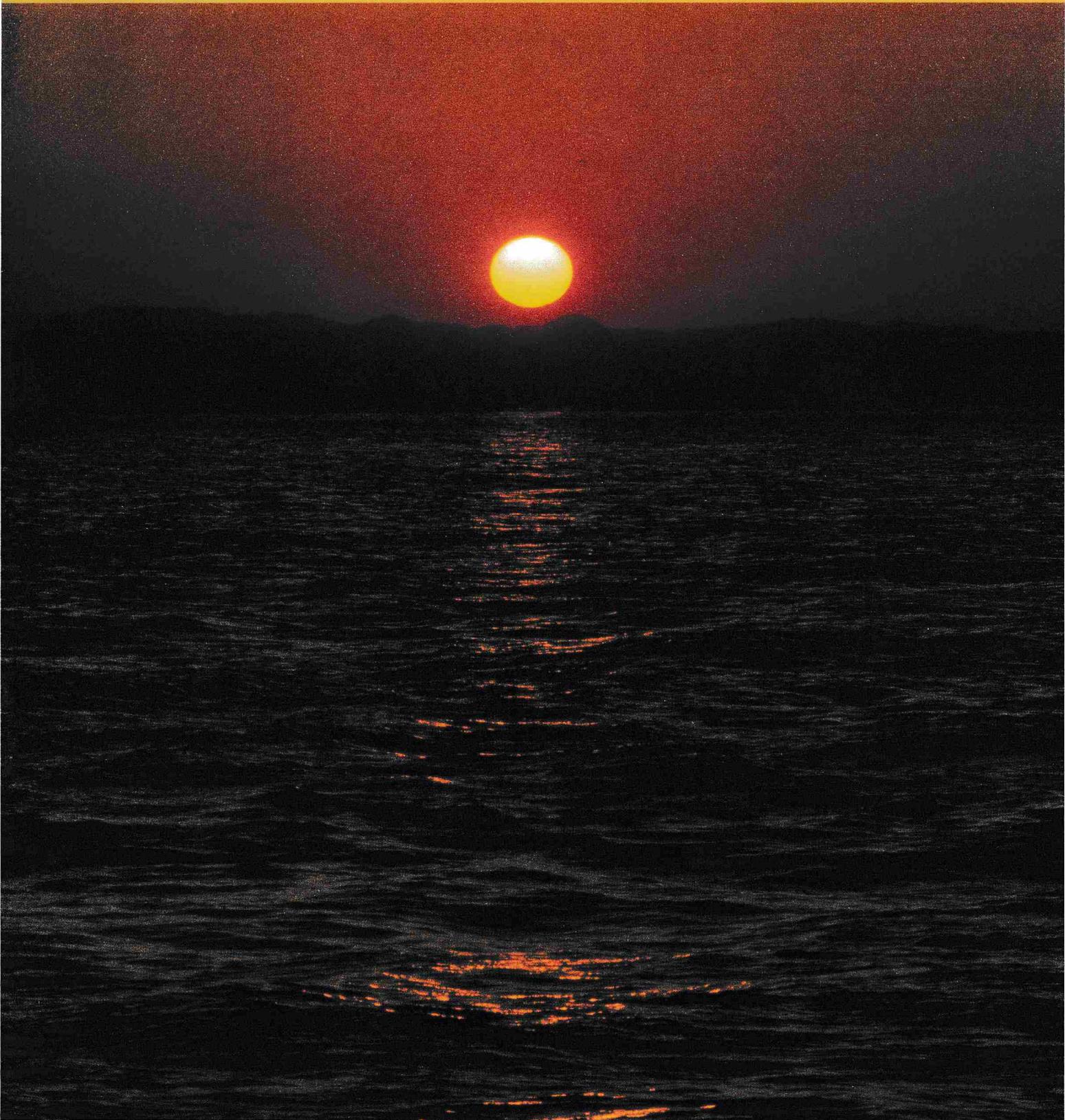


1995/8 No.19

aaca

社団法人日本建築美術工芸協会



CONTENTS

阪神大震災—調査研究委員会レポート…	1
'95新潟シンポジウム「海と景観」 ……	10
'95新潟シンポジウムに参加して ……	13
新理事抱負	
池原義郎・宮脇 檀……………	16
三木多聞・加藤貞雄……………	17
時代の華一輪	
小林治人……………	18
アピアランス(会員作品紹介)……………	19
aacaトーク	
並木恒延・久家道子……………	20
澄川喜……………	21
TOPICS……………	22

■表紙写真

新潟より日本海を望む夕景

阪神大震災一調査研究委員会レポート

HIDEO MORIYA

守屋 秀夫

調査研究委員会委員長・千葉大学教授

千葉市稲毛区弥生町1-33

TEL. 043-251-1111

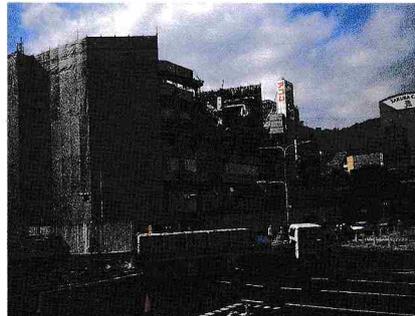
被災地を訪ねて

1月17日の阪神大震災の数日後、調査研究委員会を開き、a a c aの視点から被害の状況を調査しておく必要があるだろうと話合った。そして、何人かの委員が2月にはいってから、神戸など被災地の主としてパブリックアートを中心に回って来てくれた。その結果が3月の調査研究委員会で報告されたが、建物のように個々の作品の被害状況を報告してもあまり意味がない。むしろ、現地を見てきた各人の感想を述べ合って議論をしたほうが意義があるということになった。

4月初旬、私も地震後初めて神戸の街を歩いて回った。JRの山陽線がやっと東西つながったときであり、まだ傾いたままの家が多数放置された姿もあった反面、三宮の商店街などは表面的には活気を取り戻し、人々の表情にも明るさが見えてきていた。

出かける前に目にした資料には、美術館などにおける美術品の被害や、劇場・ホールにおける施設の物的被害などが報告されていたが、概して建築の被害に較べればそれほど深刻なものではなかった。

しかし、現地で見たものはこれらの報告から受ける感じとは違った実状であった。例えば三宮にある神戸市立博物館は、



三宮の被害状況。崩壊した建物や、解体用の足場囲いをされた建物と並んでいる。

「建物全体の被害が大きく、開館のメドはたっていない。」(1月21日朝日新聞)とは報道されていたが、外観でみるかぎり建物は無傷に近かった。ただ、前面の道路面は大きく沈下し、舗石も波をうって暴れており、道路との取り付け部分の破壊はまったく放置されたままであった。玄関扉には「当分休館」の知らせが淋しく貼り紙してあった。市民ホールの類も同様で、施設としてはほとんど無被害であっても、催しは当中止となり、広いロビーなどを利用して市民への各種連絡の基地となっていた。地震直後には避難場所や物資の配給所になっていたのではないかと想像される。屋外に置かれた彫刻なども、作品自体が倒れたとか破損したとかいう次元の問題ではなく、作品は無事でも足元の地盤が荒れたままになっていけば、前を通る人たちからはまった



神戸市立博物館。玄関扉は閉鎖され、「当分休館」の貼り紙がしてあった。

く無視されているように見受けられた。住宅・商店・工場・事務所のように、サバイバルな状況でも生きていくために直接必要な施設は、ともかく機能の復帰が急がれる。学校なども、災害直後の何日間かは機能中断もやむを得ないとされても、一月二月とたてば正常に戻ることが要請される。これに対して美術館やホールなど文化施設といわれるものは、たとえ機能的に活動が可能であっても、しばらく機能を停止させるのが危機に面したときの自然の成り行きなのであろう。

通りゆく人々から相手にされない彫刻を見て、その作品を哀れと思う反面、そのようなアートと人々との間に心の交流が感じられた状態、美術館やホールに行くと人々が文化を楽しむことのできる状態の、平穩のありがたさを改めて感じたのである。

NORIKO TSUYUGUCHI

露口 典子

プロデューサー・アートワーク風場主宰

東京都杉並区和泉2-36-7-302

TEL. 03-3324-2384

わがふるさと神戸が語ること

神戸が大震災に見舞われた。幼い頃より慣れ親しんできた街が…。無残に壊された神戸を見たくはなかった。しかし、故郷だからこそ、また、アートに関わるものとしては、どうしても自分の目で見

ておきたかった。

2月10日から12日の3日間、複雑な思いが交差する中を、委員の方々と被災地を歩いた。その時の経路を、街の様子を織り混ぜながらたどってみたい。

2/10(金)

・早朝、東京を調査委員4名が出発(日

高、坂上、中島、露口)

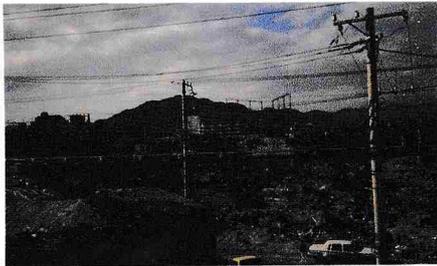
途中、京都より会員2名が参加(山本、龍田)

・昼過ぎ、JRと代替バスを乗り継いで三宮に到着

(三宮駅周辺では、ほとんどのビルが崩壊、傾斜、倒壊)

調査ルート図

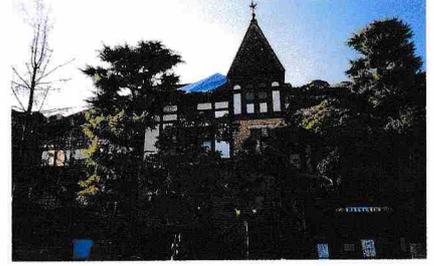
- 2/10ルート ■
- 2/11ルート ■
- 2/12ルート ■



車中から（長田近辺）



海岸線に設置された彫刻（メリケン波止場）



アンノン化された異人館近辺

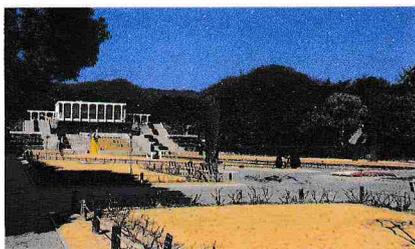
- ・市役所所轄部署に挨拶
（旧市庁舎は報道通りの崩壊。新舎は被災者で足の踏み場もない有様）
- ・市役所～フラワーロード～
（花と彫刻の道として昔から親しまれているフラワーロード。すぐ横の公園には炊き出し用テント。お風呂の案内を貼られている石の彫刻に一部剝離があるものの、他の作品は特に影響なし）
- ・～海岸通り～旧居留地～
（ここは神戸の近代的まちづくり発祥の地。重文の十五番館は全壊だが、神戸税関など大正から昭和初期の石の建造物は外見上無事。道路部分が沈んで建物との落差約45cm）
- ・～メリケンパーク～ハーバーランド
（比較的新しく設置された作品が多い所だが、いたる所に見られる液状化や地割れの影響も受けずに無事。海岸縁りに設置されていた彫刻は傾く）

- ・ハーバーランドから船が出ていることがわかり、大阪天保山へ。大阪泊。
- 2/11(土)
- ・5名(日高、坂上、中島、龍田、露口)で天保山より船でハーバーランドへ
- ・神戸駅からJRにて須磨へ
（長田、鷹取、須磨と、車中から見える風景は無残。かつての賑わいは焼け野原。駅がひとつ完全に消失）
- ・須磨離宮公園（閉鎖中）
（1968年より現代彫刻展開催。昨年で14回目。受賞作は市の各所に置かれている。週末は家族連れで賑わうはずが、人ひとり見当たらない。噴水の一部、石燈籠、狛犬に被害が出たのとは対照的に、現代アートの作品は冬の陽射しの中に健在で、地震とは無縁に見えた）
- ・JRにて神戸駅～湊川神社～
（楠正成を祭った湊川神社では、参道に並んだ石燈籠がドミノ倒し。狛犬は

- 地面に倒れ、石の鳥居はボルトの所から折れるという惨憺たる有様）
- ・～神戸文化ホール～
（ホールの玄関は傾いているものの、玄関前のオブジェは無事。ホール横の公園では、石碑に一部剝離、噴水中央の彫刻が倒壊していたが、他の彫刻は無傷。ここは裸婦像が多く設置されていたが、通常より浮浪者の溜り場らしく、奇妙な風景になっていた）
- ・～みどりと彫刻のみち～高速神戸駅より阪神電車にて三宮へ
（ホールより湊川神社に沿って神戸駅までの道の彫刻はほとんどが裸婦像。人、動物、建物、乗物と、ありとあらゆるものが被害を受けている中で、裸婦像だけが堂々と立っている姿に何か違和感を受ける。それにしても、神戸にはこんなに裸婦像が多かったのだろうか）



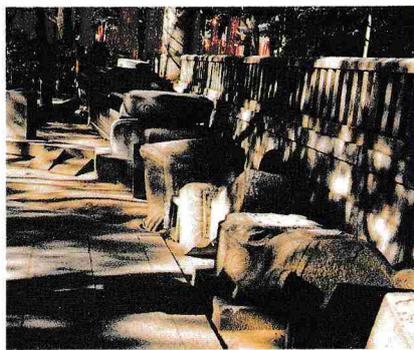
神戸市役所と広場の彫刻（フラワーロード）



須磨離宮公園の彫刻たち



谷崎潤一郎の世界が消えていく



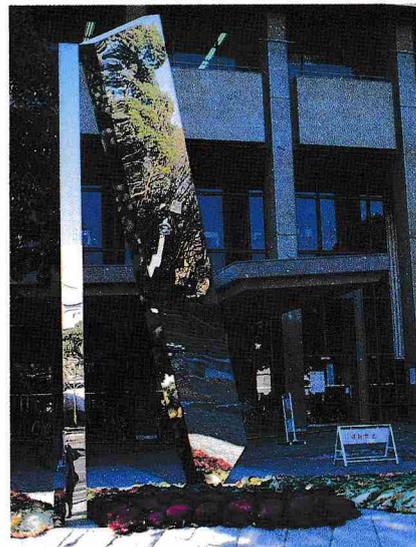
ドミノ倒しの石燈籠（湊川神社）



余震に備えて床に寝かせた展示作品
（芦屋市立美術館）



建物と道路の落差（海岸通り）



傾いた玄関と無傷のオブジェ
（神戸文化ホール）



液状化の影響を受けた彫刻
（ポートアイランド）

・～生田神社～回教寺院～中山手カトリック教会～

（宗教建築物は、程度の差はあれ、すべて被害を被っている。人々の心の拠り所ということからは、被害は建物だけにとどまらないと思われる）

・～風見鶏の館～うろこの家

（煙突などが破損したものの、他と比べれば被害は少ないように見えた。事実、近所の家ではコップひとつ割れただけとのこと。

しかし、久し振りに訪れた異人館近辺は、すっかりアンノン化されてしまい、あの懐かしい神戸の面影を伝える風情はなくなっていた）

・新神戸より地下鉄他を乗り継いで三田経由で大阪へ。大阪泊。

2/12(日)

・2名（坂上、露口）で天保山より船でポートアイランドへ

（液状化の後の砂、ほこりの中を、住人たちは水を運んでいる。島全体が50～60cmは沈下しており、どの建物も歩道との落差が生じているが、驚くべきことに、超高層ビルには外見上の被害は見えない。ガラスもほとんど割れず、彫刻にもほとんど被害がなく、人の姿もあまりなく、島は静まり返っている。映画のシーンを見ているような錯覚に陥る。

建物と一体化した作品、建物と歩道の境に設置された作品などには、被害がでていたが、そのような作品そのものの数が少ないように思われた）

・午後から2名（西宮在住調査委員竹村・駒田）と合流。芦屋・西宮を車でまわる。

（残念なことに芦屋、西宮の旧家は全壊が多い。土蔵、木造建築物が失われ、谷崎潤一郎の世界が消えていく。

ライトの山邑邸は多少損傷があったものの無事を確認）

・芦屋市立美術博物館～大谷記念美術館

（芦屋市立美術博物館はさほど被害がなかったものの、大谷記念美術館では収納庫地に被害があった。その上、被災者150人が避難中。

地震国日本なのに、美術館には危機管理のマニュアルもないのが現状。被災者がすべて去り、美術館が再び機能し始めるのはいつのことか…）

震災後、土木、建築、防災、都市計画、教育、心理学…様々な分野の人々が、神戸について意見を述べている。もっとも多くの人たちが、神戸について話しをして欲しい。今回の阪神大震災が残したものは、ひとつの分野だけでは、到底解決できない多くの問題を抱えている。今、調査研究委員会でも取り上げている問題も…。

HAJIME IMAYOSHI

今吉 祝

アーティスト

兵庫県神戸市兵庫区下三条町9-12
TEL. 078-579-2519

街の再生とパブリックアート

1月17日午前5時47分、布団の中。

ただ事ではない揺れに、『冗談じゃない、こんな地震、嘘やろ。』確か、神戸にいるはずなのに、ここは、わたしは、まだ、東京？ なにが起こっているのかは、わかっていても信じられなかった。昨年、東京にいる友人達に、「そろそろ、来年あたり、大きな地震が来そうだから、神戸に避難するわ。」と捨て台詞を残し、神戸に拠点を構えるつもりで、戻ってきたところだった。そして、今日はその事務所兼アトリエの、まさに契約の日だった。いらぬことを言うものではないなと布団の中で後悔をした。

揺れが治まり、暗闇の中、起きだし、家族の安全を確かめあった後、布団の回りを見ると、とっさに丸まり布団を深く被っていたおかげで、足下に倒れた、タンスの下敷きだけは免れたようだ。電気はつかないし、外の信号機も消灯したままであった。水は、まだ出るようだったが、止まってしまう前にすぐに浴槽に水を溜めて、外に飛び出した。向こうの方では真っ黒な煙と火の手が上がっているが、近所はどうやら無事ようだ。しかし、あちらこちらで、屋根瓦が崩れている。わが家も、同様である。火災の灰が降ってはくるが、1キロは離れているので、緊急の危機がないことと思い、やっと探しだしたラジオを聴きながら、明るくなるのを待った。予想以上の被害の大きさを知るのには、電気が一時的に復旧し、テレビのニュースで、中央区の生田神社の倒壊を見た瞬間であった。そこで安否は連絡しておかないと、と思い、昨年末、退職した事務所に連絡を入れたが、「写真でも撮って、また今度でも送ってくださいよ。」と、悪気はなかったのだろうが、のんきな返事が返ってきただけであって、これから先の中央の対応を予見させていた。600キロも離れていれば仕方がないかと思った。

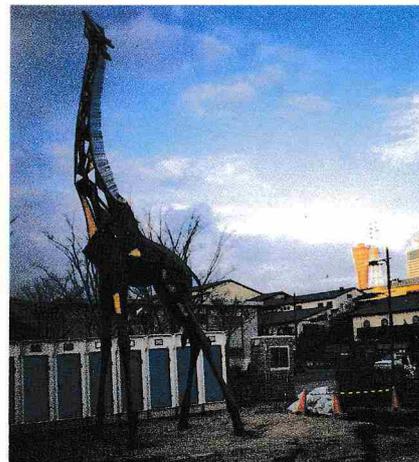
一週間くらいは、自転車で市内を西へ



東へと、友人、知人の安否の確認、倒壊家屋の片付けの手伝いと、駆けまわったが、神戸市のほぼ中心の兵庫区に住んでいるおかげで、市内各所を廻るには、苦勞しなかった。まるで父に聞いた神戸大空襲の後のようになった情景を、不思議な気持ちと複雑な想いで走り回った。確かに、十数年はこの地を離れていて、帰郷するたびに、刻々と変わりゆく都市の姿、無機質な空間の広がり、寂しさを感じていたのだが、ここまで破壊されてしまうと想いもしなかった。しかし、東西に細長く広がる街、海と山の姿を見るとそこはまぎれもなく神戸の街なのだ。

ここ数年は、制作活動よりも、パブリックアートのコーディネートをしていたので、神戸の彫刻達はどうなっているのだろうと、注意しながら見ていたが、想像していたよりも倒壊率は低かった。軒並み倒れて破損してしまっているかと思っていたのだが、基本的にバランスの悪い、重心点の高い作品が倒れてしまったようだ。岐阜の彫刻家、中岡慎太郎氏も、六甲アイランドの自分の作品が気になったようで、連絡があった。道路状況から、進入可能なルートを伝え、数十時間かけ神戸にたどり着いた。さっそく、わが家を拠点に自転車で六甲アイランドへと向かった。幸い、中岡氏の作品は無事だった。六甲アイランドは地盤の液状化で建物から、30センチ以上歩道が沈下していたのに、設置されている十数点の作品は1点を除き、ほとんど無事であった。バラバラになった1点は、金属の作品だが、接着剤を使用して制作されていた為、歪みに弱かったようだ。他の金属作品は溶接で造られているため、まったくの無傷であった。なかでも、田中昇氏の接合部分のデリケートな石の作品が、そのままだったのが不思議であった。おそらく、基礎にかなりしっかり固定されていたので、作品がぶれずに、そのまま沈下したのだろう。

今までここまでのケースを考えての彫刻配置計画を想定したことはなかったが、ある程度の不測の事態は必ず考えてきた



ハーバーランド

つもりである。地震の多いI市の計画でもなるべくその点を配慮した彫刻の選定で提案を行った。しかし、今回のこの震災で、過度にパブリックアートの設置に気を使われるようになるのではないかと心配である。過剰な制約が自由な表現の妨げにはなりはしないかと、ある程度の仕事量をこなしてきた立体作家にとって作品の強度は構造計算をするまでもなく体感で理解しているはずである。また、設置に関わるバックグラウンドを整備してフォローするのも、パブリックアートを提案するものの重要な役割といえる。

今回の震災を体験して、芸術のできることは何なんだろうと、考えさせられた。ある立体作家が、震災の焼けた廃材を使い作品を造ろうとして、住民にひんしゅくを買った。当たり前である。家族の命を奪ったもの、思いでの詰まった場所、そんなものを他人に興味本位で踏みじられたくはないはずである。人の心を強く刺激するものが芸術であるならば、ヒューマンリズムを無視してでも、表現する自由をゆるしてもよいのだろうか。外国ではそんな表現法をとる作家もいるが、日本人の心情に訴えかけることは難しいであろう。しかし、この件に関しては、まだまだ考えることはいっぱいあるだろう。それよりも、これから再生していく街のための、パブリックアートを考えることが先決かもしれない。

MAKOTO YAMAMOTO

山本 誠

環境デザイナー・映像ワイドー代表
埼玉県新座市栄3-7-7
TEL. 048-478-3996

神戸で考えたこと

パブリックアート被害状況の調査のため、2月24日神戸に向かった。震災から40日を経過していたが、三宮駅に近づくにつれ、壊れた民家や青い養生シートに覆われた建物が多くなる。このような中で被災者の生活を想うと、部外者の立場に気後れを感じたが、まずは市役所に出向く。野外彫刻の被害状況を伺うこととしたが、すぐに直面したのがホールに寝泊りしている被災者の現実であった。

市民局文化振興課では被災者への救援活動の中、手分けして屋外彫刻の被害調査を進め、ほぼ現況の把握は済んでいた。それによると市が設置した「都市彫刻」の総数は約350基ほどあり、そのうち「異常なし」が約300基、「倒壊」が22基、「損傷」が24基である。被害状況の写真を見せていただいたが、なかには彫刻の真下に地割れが走り不可抗力としか思えないものもあるが、一般的に石の彫刻の被害が多い。ただ重ねたものはもちろんのこと、長さ20cm以上の鉄筋のアンカーがいとも簡単に外れて転倒している。幸い屋外彫刻による人的被害は無かったようだが、人の集まる場所に設置されることの多いパブリックアートの安全対策には慎重でなければならぬと改めて思った。

MIEKO NAKAJIMA

中島 三枝子

画商・ギャラリーえ・るたん代表
東京都新宿区百人町1-17-5-304
TEL. 03-3496-3666

震災とアート

阪神大震災の数日後、神戸在住の当会会員の生々しい被害状況を聞いた時、即、「これは現場を見なければ！」と慌しいスケジュールの中、神戸に向った。大震災後の美術館内の観賞用美術品は？景観としてのパブリックアートは？非常に気



まるで映画のセットのような波止場
(ポートアイランド)

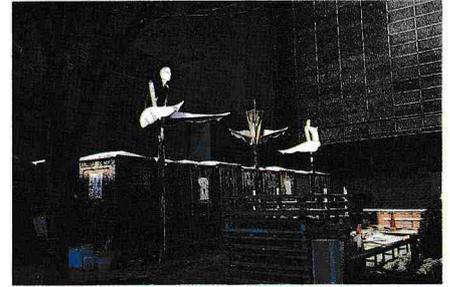
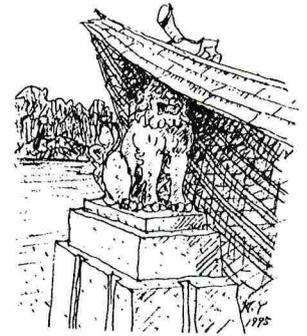
市役所をあとにして、フラワーロードをポートアイランドに向かったが、やはり被害を受けたビルが目につく。ポートライナーは柱脚を残すのみで桁は全て撤去されており、高速道路の柱は中央部でふくらみ、鉄筋が出ている。ポートアイランド、メリケン波止場は護岸部が海にすり落ち、地面は大きくうねったまま硬直した状態で固定され、まるで怪獣映画のセットのようで、現実とはとても思えない。液化化による砂の浮きあがりや地盤沈下による段差がひどく、建築の基礎部と一般の地盤にまたがって設置されているモニュメントは、基礎のずれによる被害が出ている。

伝統のある瓦屋根の住宅や、歴史的な神社仏閣などの被害が著しいが、これを

になった。

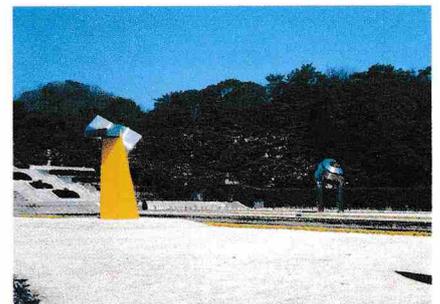
復旧乏しい交通で三宮の神戸市役所に迎り着くと、これが現実であるという光景に胸を打たれる。高層ビルが前後、左右に傾いた様子は、地震の恐しさそのものであった。

彫刻のある街づくりとして358点の作品が点在している神戸。又、須磨離宮公



オブジェと仮設の便所(海岸通り)

きっかけに歴史的なうらおいのある景観が失われるとしたら本当に残念だ。伝統的な工法や素材に対する安易な否定により、画一的な味気ない“まち”がますます多くつくられるのを恐れるのである。また、被災したまちの中でパブリックアートがなぜかよそよそしく見えるのは単なる私の感傷であろうか。借りもののイメージや急いでつくられることの多い“まち”そして“アート”。その地域や歴史と人々の生活からかけ離れてつくられたモノの本質が露呈したということであろう。安全性は確保されなければならないものの、その土地の風土や伝統をふまえ、生活に根強く結びついたものでなければならぬということを、被災地の中で改めて実感させられたのである。



須磨離宮公園

園現代彫刻展をピエンナーレ(隔年おき)に開催してきた町としても、よく知られている。

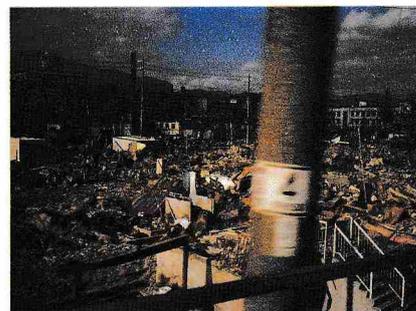
野外彫刻の多くはストリートアートとして市内の各所に設営されていた。資料で記憶はあったものの、作品の多さには驚かされた。むしろ震災以前に、この様な数の作品のコーディネートに疑問を持った。

石彫、ブロンズ、その他金属の作品群は、予想以上に被害は少なかった。しかし現場に着いた時は既に撤去された作品もあり、設営等の関係を把握することは不可能であった。それにしても壊滅的な街並みを背景に、通りにそそり立つ彫刻

の作品群は、虚しく、「アートとは何んだったのか?」と問いかける様な気がしてならなかった。

翌日、須磨離宮公園に向う折、線路に沿った長田地区は、あたり一面焼け野原の原野と化し、正に戦火の後と言ってよい酷さであった。須磨に近くなると日本家屋の倒壊は著しく、瓦の重さで耐えきれず、木造家屋が押し潰されている。日本的景観を保ってきたこの地の風景は、この地震で変わらざるを得なくなり、今日まで継承した、ある意味での文化的遺産さえも、失ったことも、目のあたりに実感した。

わずか2日間の被害調査ではあったが、



長田地区

あの状況下では、人々の生活の手助けが先決であり、文化的損失に関心が向う方には、時間と、精神の両面の回復が必要であろうと心に残った。

YŌKO TAKEMURA

竹村 楊子

インテリアデザイナー・アートプロデューサー
株AD&A代表

大阪市港区海岸通2-6-15-310
TEL. 06-576-1491

震災によるアートの被害状況

目を疑うばかりの倒壊の中、街の中のアート、又、美術館やギャラリー、個人宅に展示されていたアート作品はどういう状態であっただろうか。

1. 恒久展示と考え設置されたパブリックアートは、案外軽傷なものが多かった。中には基礎より根こそぎ倒れたものもあった。

2. 一時的に、ある期間展示されていた作品は、大変な被害があった。各美術館ニュースにその様子があるが、特に陶器(出光美術館はガラスケースごと倒れた)、石彫を中心に多数あった。私のAD&Aギャラリーも、当時石彫展をしており、鉄板にアンカー付の台にのっていた作品が、そのアンカーを飛び出し倒れていた。台上の小品も台ごと倒壊していた。

この様に、今回特に目に付くのは、石彫類の被害が大きかった事である。街の中においても門、鳥居、狛犬、石灯籠、

石碑、お地蔵、墓石等も、ことごとく倒壊した。鳥居においては、基礎より根こそぎ倒れたもの、地上1mの所で折れたもの等がある。これ等の問題としては、石は自重があるので、置いただけで安定するという事で、灯籠、墓石等はホゾもなく置いてあるだけであるし、石碑の大きなものも、アンカーがあっても、今回の地震には小さすぎたのである。であれば、基本的には、基礎を大きくしっかりする。アンカーを入れ、そのアンカーもシール剤を入れ、しっかり固定する事が必要と考えられる。

しかし、余談になるが、昨年の猛暑の後、広島に設置された6mの石のモニュメントが2つに折れた。これには、ステンレスの棒が内部に補強の為に入っていた。皮肉な事に、このステンレスが猛暑で予測を越えて膨張し石を破壊したのである。人間の浅知恵の仕掛けは、自然の力の前では誠に心許無いものである。

この状況を見て来たなかで、私が今一



ギャラリー内作品の倒壊(大阪)

番困っている事は、展示会の展示方法に、決定的な名案がない事である。震災直後の、東洋陶磁美術館の「皇帝磁器展」では、すべての陶器がテグスでしっかりと固定されていた。しかし、現代アートのギャラリーでは、インスタレーションや、大きなオブジェ等の展示には、安定を心がける以外にない様である。2m高、何トンという石彫が、観客のいる時間帯に、地震で倒れたらという悪夢は消えない。

建物にしても、住宅にしる、アートにしる、いかにも倒れそうなものは倒れた。といって全て、倒れそうもない造形にするのだろうか。倒れそうで倒れない、あやうい造形が一つの美である事に変わりはない。

日高 単也

建築造形家・デザイナー

日本大学教授 日高研究室

千葉県習志野市泉町1-2-1

日本大学生産工学部建築工学科日高研究室

TEL. 0474-74-2496

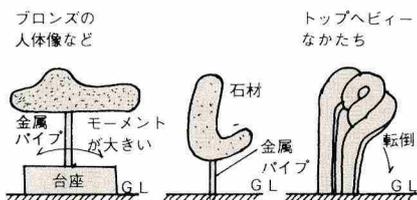
立体作品の被害について

調査対象のパブリック・アートのほとんどが、建築物や高架道路のように、構造的な設計基準に基づいて、構築されたものではない為、チェックの基準とするものがある訳ではない。したがって、この度はきわめて、感覚的にとらえた、感想の域にとどまった状況判断であることを、まずおことわりしておく。

また、ここでは、作品一つ一つの被害状況を述べるのではなく、まず被害を受けた作品に共通した要素（形体的、材質的）を抽出することを行ってみた。現地入りしたのは被災から3週間余り経過していた為、被害を受け倒壊した彫像等は、すでに市役所側によって片づけられたものもあり、現場に無惨な姿をさらしているものばかりではない。現場から片づけられていた作品に対しては、神戸市で刊行した「彫刻の街こうべ」に掲載されている作品写真と照合し、被害を推察（原因となった形体や材質）するにとどまった。比較的被害を受けた立体造形物について。

1. 形体的な面から

① トップヘビーになった、一見して不安定なかたちのもや、宙に浮かせる表現の物は転倒・破壊したものと思われる。

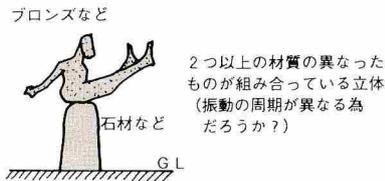


② 比較的高い台座の上に設置されている彫像で、台座と彫像との結合が弱いものは、台座からはずれて落下したと思われる。

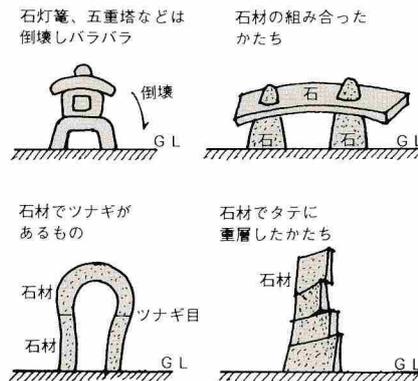


2. 材質と形体の面から

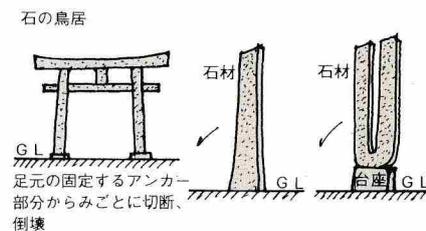
① 金属（ブロンズ、ステンレス、鉄、アルミ、...）など粘り気のある材質で、単一の材料で構成されている物は、比較的被害が少なく、二つ以上の異なった材質の組み合わせによるものには被害が見られる。



② 石材（粘り気の少ない材質）で組み合わせによるもの、重層するものは被害を受けている。

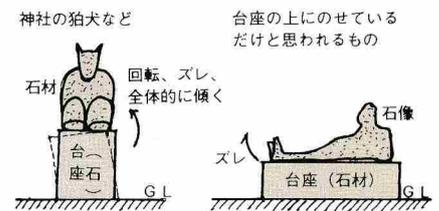


③ 石材によるスリムな形体をしたもの。



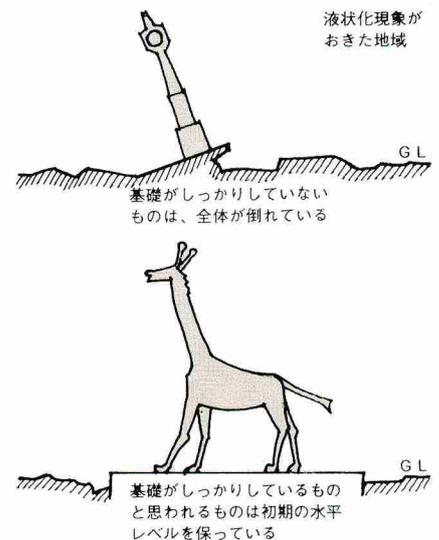
④ 平面的に広がりをもつ、石材の組み合った（集合）構成のもの。石組みの池や、石材を敷きつめた構成のものは、地盤の変動を直接受けて、初期の構成を保持しておらず、ガタガタにくずれている。

⑤ 重量のある石材で重層しているものは、倒壊はまめがれても、水平方向に回転・移動しているものが多い。



3. 基礎の面から

液状化現象がおきた地域での野外設置造形物（モニュメント、ガス灯...）は、地中にしっかりした基礎を設けていないものは、ほとんどが全体的に傾いてしまっている。基礎をしっかりと設けていたものは、初期の位置に水平レベルを保っており、基礎の周辺地面は波うち、地割れが生じている。



倒壊した石の五重ノ塔
(須磨離宮公園)

HARUTO KOBAYASHI

小林 治人

設景家・株式会社ランドスケープ研究所代表
東京都渋谷区神宮前1-16-4
TEL. 03-3404-3601

都市内オープンスペース の重要性

阪神・淡路大震災は他人事ではない。それも世界で最も高度な文明を誇る国の、最も高度な機能を持つ大都市に起こった。歴史的に内外の大震災を振り返ってみると死亡者数など今回の数十倍の例がたくさんあるが、人間の科学技術に支えられてきた文明がもろくも崩れ去ったその規模と被害額の大きさにおいて、世界に前例がないものとなった。

ランドスケープ・造園の分野を包括する設景の概念で仕事をしている立場からすると、大地の営みを科学しながら人々が安全で快適な生活が保障された町づくりを進める事を究極の目的とする側面を持っていると自負してきたが、今こそその真価を発揮するときではないか、私の立場から見るとやや手前味噌になるけれども、いつの災害においても人々の尊い命を災害から守る事に役立ち、被災した方々の仮の避難地としてフルに利用されたのは、公園・緑地であった事実を思い起こす。

阪神・淡路大震災の場合も例外ではなかった。震災の発生時多くの人々は、緊急避難場所として、公園に難を逃れた。幸い神戸市は、公園一人当たり面積が全国平均6.1平方mの倍以上の、14.5平方m（平成4年3月）のストックがあり、被災者は学校、公園などに多くとどまっているのが観



庭園風に仕上げられた石積はもろくもくずれ去った。

察された。さらに家屋被災者の一時居住地（一時的にはテント、中期的には仮設住宅用地）として、あるいは即席のテントや自動車に人が仮住まいしている公園が多かった。本来ならば屋内の避難施設に全避難者を収容するのが理想であるがその保証はないし、たとえできて避難施設における窮屈な環境よりもオートキャンプなどを利用する人も散見できた。その他、生活物資の配給所、トイレ、自衛隊のキャンプ地、物資のヘリコプター輸送基地、廃棄物の一時堆積地、など多様な利用がされていたことが確認された。政令指定都市の中で神戸市は、住区基幹公園の整備水準を見ても最も高く一人当たり3.3平方mありこれが良く機能したようである。自分の住まいの近くの公園に避難して遠くに離れたくないと言う人々にとって、住区公園は特に有効に機能した、しかし、もし強風下であったらどうであろう、避難民が猛火の餌食になる



住区基幹公園整備の進んだ地域では緊急避難場所として役立った。

こと間違いない。小公園だけでは限界のあることを知るべきである。

また被災地を歩いて目に付く事は、多くの樹木がしっかりと立っていたことである。国道沿いの街路樹などは倒壊した家屋を支えて道路の空間を確保する事に役立っていたし、大公園の樹木は焼け止まり効果を発揮して樹木の持つ防火効果を立証した。また神戸市街地を南北に流れる河川はブロックなど三面張り構造のため被害が多かった。淀川などの一部の環境還元型の多自然工法の場所においては、その柔構造のゆえに地震の衝撃を吸収して、被害が少なかった。それに反し、都市の高密度利用が進んだところ、あるいは最近の人工的な工法と施設に依存した箇所の被害が大きかった事を考えると都市の過剰な高密度利用の抑制と、都市の基盤としてのオープンスペースの確保を常識とした都市造りをするための社会的認識が必要である。

NAOYA SAKAGAMI

坂上 直哉

アーティスト・アートワーク園 主宰
調布市西つじヶ丘2-18-8 SAKAビル301
TEL. 03-3308-8418

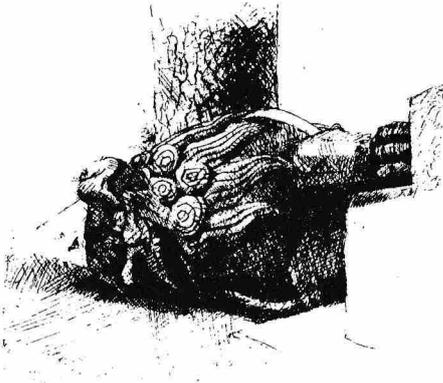
モダンアートの限界

1995.2.10 阪神大震災より24日目に神戸に向かった。調査の初日JRが武庫川を越えると、突如日常は崩壊し、あたかも爆心地にいきなり入ったかのような風景になる。阪神大地震は被害が震源に向か

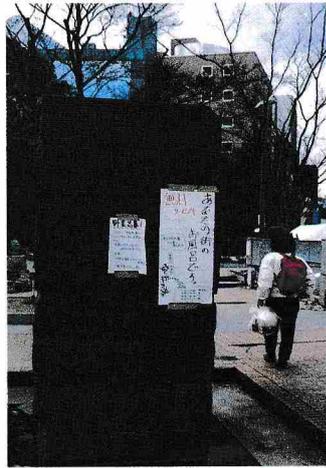
って暫時増大するのではなく、ある臨界点を超えると地震が屠殺のごとく家宅を破壊し葬ったかに見える、それは凄まじく、道がうねり、ビルが傾き、砂は吹きだし、鉛直を失ないめまいを感じる程の惨状を呈していた。その中を埋立地の様子、明治、大正の石作りのビルの状況、

高層ビル、山の手の木造家屋の状況、美術館の災害時における問題点などその調査はa a c aらしく広範囲におよんだがここでは狭義な意味での公共美術についての印象を述べたい。

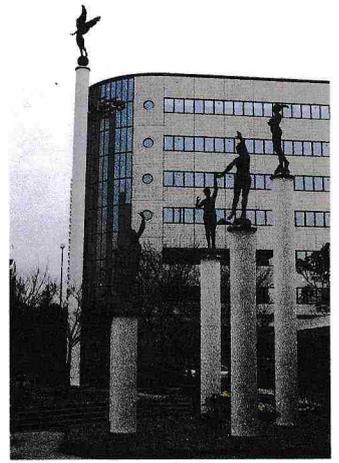
モダンアートは石の作品の部分があるところどころ割れている位で金属（ステンレス、



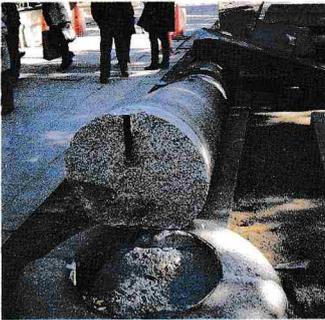
心痛む狛犬の姿 (湊川神社)



彫刻の伝言板 (神戸市役所横)



超然とそびえ立つ彫刻 (ポートアイランド)



根元から倒壊した鳥居 (湊川神社)



山の手の木造家屋 (芦屋)



被害の大きい神社仏閣 (湊川神社)

ブロンズ、鉄)、コンクリートのオブジェ、彫刻、モニュメントはほぼ無傷と言っているほど地震に対して超然と立っていた、傾いているのは作品自体でなく建物の基礎と地盤との間に出来た段差によるものが殆どである。それとは対称的に地域の中で大切にされてきた日本のトラディショナルなアート、鳥居、狛犬、灯笼、野仏、等の多くは倒壊し被災者と運命を共にしたようにみえる。被災者は、その姿に心を痛めているように見えたのに対しモダンアートはほとんど顧みられていなかった。

この凄まじい破壊と放心の中で、モダンアートをルーツとして、公共空間に設置された作品は被災者にとって伝言板以外の役割を担ったのだろうか、そこには人々と共有するエナジーやエスプリはなかったのだろうか。私は、近代をディティールの内から魂の暫時失われた歴史と考えていたとはいえ此の白日の中で毎日毎日見せられる公共美術は一部を除き、歴史とも、自然とも場所の意義とも関係せず多くは私、私、私の厭わしいほどの羅列にすぎず被害者との魂や心の交感は一切ないことを鮮

烈に感じる。モダンアートをルーツとする公共美術の出生を見直す時期に来たのではないだろうか、最近よくおこなわれるプロデューサーによる場に合った作品をセレクトしたりサイトの機能による空間作りにしても、近代を支えてきた人間中心の世界観を分母としているかぎり次のプラットホームは見えてこないだろう。事、物への発想のシステム、制作のシステムそこに今大震災が起きている。

まとめ

守屋 秀夫

阪神大震災の現地報告としては、これまで建築物土木工作物の被害状況や被災者たちの生活が種々の機関によって調査され、多くのメディアを通じて報告されてきたし、美術品そのものの被害に関しても美術館の組織等で行われているが、建築や周辺環境に密接に結びついた工芸

・美術に着目した視点は乏しかった。調査研究委員会の調査はこうした視点に立った調査であった。われわれ建築・美術・工芸等の分野で活動するものは、地震その他の災害を考慮することが比較的少なかったように思うので、この点を改めて思考しなければならない。

そればかりでなく、今回の調査が、災害を通じて文化がもつ社会的意味を考え

るきっかけを見出したことにも大きな意義があると思う。

このような問題は今後さらに多くの人を交えて討議すべきであろうと考え、10月には関西に会場を選んで、「地震と環境造形」というテーマでトークのようなものをしてみたいと企画をすすめている。

なお、今吉祝氏には特別寄稿をお願いしたものである。

'95新潟シンポジウム——「海と景観」

日時 平成7年6月9日(金)
午後1時～5時
場所 新潟グランドホテル

パネルディスカッション

司会：内井昭蔵
パネラー 池田武邦
豊口 協
長谷川逸子
樋口忠彦



あいさつ



新潟県出納長
本間栄三郎氏
(新潟県平山征夫
知事代理)



新潟市市長
長谷川義明氏



社団法人
日本建築美術
工芸協会会長
芦原義信

開会あいさつ

「日本建築美術工芸協会は、建築家や美術家、工芸家らが参加して設立された団体。パブリックアートや都市景観をはじめとする様々な問題について、討議、提言を行う一方、シンポジウムや講演会などを通じて、広く社会と景観に関する意識の向上を呼び掛けている。景観シンポジウムもこれで7回目。日本海の自然に恵まれた新潟県ということなので、今回はテーマを『海と景観』に決めさせて頂いた。素晴らしい方々をパネリストとしてお迎えすることができたので、貴重なご意見、ご提言を頂けるものと思って

いる」

特別講演

海の尊さ考えて 景観・環境保全



文化庁長官
遠山敦子氏

『海と景観』というテーマの今回のシンポジウム。日本は四方を海に囲まれているながら、その重要性に対する認識が低い。

多くの歌に詠まれたことから分かるように、文化という側面からも、海と人のつながりは深い。ところが、現在は自然海岸が年々減少し、かつての名勝なども姿を消しつつある。海の大切さを、尊さをもっと考えて、景観や環境を保全すべきだと思う。

『白砂青松 (はくしゃせいしょう)』という言葉があるが、『そんな言葉があったのか』と後世の人にいわれないようになってほしい。

パネルディスカッション

景観と進化調整が必要



司会：
京都大学教授
内井昭蔵氏

テーマは『海と景観』。海と私たちの生活のかかわりということで、過去、現在、未来に目を向けて問題点を確認し、より良い海と人の関係を模索するというのが趣旨。

日本は周囲を海に囲まれながら、海に対する関心は低く、あまりなじみがあるとはいえなかった。それは、日本を取り巻く海がかなり『荒れ海』というイメージがあり、自然に対して恐れを抱いていたことが原因であったと思う。

しかし、一方では、海は非常に神聖なものというイメージもあり、『遙か先には楽園、浄土がある』とあこがれを抱いていた。

ひところ、ウオーターフロントが注目され、海との関係を考える機運があったが、これはあまりに経済優先で、自然景観の破壊をもたらすなど、反省すべき点が多かった。私は景観的な視点下では、自然と人工との間に何か調和が必要だと思うが、一方、一人ひとりの『原風景』がベースとなる風景と視点から見ると心証的な風景は発見されるものだとか、進化するものとも考えることもできると思う。この双方の視点をどう調整していくかが、今日、求められていることではないか。

新潟が面している日本海は、美しい夕日や佐渡の風景など豊かな自然がまだまだ残されている。また、大陸に面し、新しい国際化に向けて脚光を浴びる海でもある。来るべき21世紀にふさわしい景観をどのようにつくっていくか、そして守るべきは何か考えてみたいと思う。

人間も自然の一部

生命を大事にする気持ち



日本設計
名誉会長
池田武邦氏

建築家になる前、船乗りだった私が毎日欠かさずやっていたことは、月齢、潮の状態、各種気象データの把握。今日ではこれら気象データはテレビなどで手軽に入手できるが、船乗りにとっては海の気象状況を知らないということは命にもかかわることなので、毎日、欠かさず調べていた。

近代文明に入ってから太陽暦が採用されているが、それ以前は月齢が使用されていた。月齢を知ることによって、人々は様々なデータを把握し、それによって生活を組み立てていた。それほど月齢は生活と密接なつながりを持っていた。ちなみに明日は十三夜、満月よりもっと美しいお月様を見ることができ。よろしかったら、ぜひ眺めて見て下さい。しかし、こうしたことも近代文明に生きている私たちにとっては、ほとんど関係なくなっているのが現状でしょう。

昭和35年ぐらいから私は、日本初といわれる超高層ビル、霞ヶ関ビルをはじめ京王プラザビル、新宿三井ビルといった超高層建築の設計にずっとかかわってきたが、地震の多い国でも建てられるようになった背景には、コンピュータの普及がある。

当時、建築界というのはゼネコン、設計事務所も含めて非常に古い体質、徒弟制度的な非近代的な体質だった。それを（コンピュータなどの導入で）近代化することが、建築界をより良い方向に持っていき、近代文明を発展させることがより素晴らしい町をつくり、素晴らしい建築をつくり、環境をつくると信じ込んでいた。新宿三井ビル完成後はビルの50階にオフィスをもった。エアコンがあり、一年を通じて快適だし、見晴らしも良かった。非常に良い環境だと思った。

ところが、ある日オフィスから、夕方下へ下りていくと、朝は全然降っていなかった雪が猛吹雪になっていた。ワイシャツ姿で仕事をしている私が外へ出ると、ものすごい粉雪が顔や体にあたり大変冷たくて、震えるほど冷たかった。しかし、そのとき私は何ともいえない精神的に心地良い安らぎを感じたのである。『あゝ人間も自然の一部なんだな』と強烈に感じたことを、今でも鮮明に覚えている。

そのときに一つのカルチャーショックを感じました。それまで人間にとって最も良い環境というのは湿度がこれぐらい、温度がこれぐらいと学校で教わったことが、科学的データに基づいて、エアコンで室内環境を調整したりしていたことがいい環境と思っていたことは、間違いだったと。肉体的には寒さや暑さはしのげるが、精神的には吹雪に身をさらし冷たさを感じるほうがずっと安らぎを得ることに気がついた。そうして、私は自身が追求してきた技術文明に疑問を持つようになり、近代建築のあり方にジレンマを持ち始めた。

そうしたことを考えてみると、私自身、自然に対する感性を失いかけていることに気がついた。大好きなヨットにも乗っていなかった。

ある日、私が企画から設計までプロジェクトに加わった長崎のハウステンボスまでヨットで旅行をした。その時に実は大変ショッキングな出来事に気がついた。海の汚染である。スクリューにはビニールや漂流物が何度もからまったりした。特に瀬戸内海を航海した時は、あまりのひどさに絶句した。

昔、ヒラメなどの魚介類がふんだんに取れたこの海を懐かしんで、また魚を食べたいと港に立ち寄ったら、汚染によりほとんどいなくなったと言われた。聞けば家庭からの排出物などが、汚染の主原因だとか。海というのは陸の生活のすべてを反映する。それが汚れるということは、陸もひどいのだなと認識してほしい。

海が美しいのはなぜか。それはそこに多くの生命があるから。水による災害を防ぐという理由で、単純にコンクリート

で護岸してしまうが、それが水辺の貴重な生態系を破壊しているということに気がついていない。考えてみると『景観』というのは、そこにある生命を大事にするという気持ちがあればぐもものではないだろうか。

時間・歴史を大切に

遺産理解する心が不可欠



長岡造形大学
学長
豊口 協氏

海と景観というテーマを世界の国々が取り上げ始めたのは、日本よりはるか昔の16世紀の半ば。このころはちょうど、大航海時代が始まったときで、世界の国々が立派な船をつくって、地球のいろんな地域をまわっていたときで、船乗りによってその機運が盛り上がった。

というのも、海から自分の国に帰ってきた時に港が、景色がどうゆう姿を保っているか、ほかの国の港は見ている彼らにとっては、自分たちの国の港が美しくあるかないかは大問題だったからだ。日本でいえば江戸時代、世界的にはシェークスピアがハムレットを書いている時代に海外では、景観を第一に考える風潮が生まれつつあった。

日本はというと、鎖国の時代に入ったため、世界が海と景観について研究をしている時に、海から陸を眺めるということから、遠去かかっていくことになった。

それどころか、逆に陸上から海を眺めて一番景色の良いところはどこだろうかと探して、そこにホテルを造ったり、見晴らし台、展望台をつくったりした。海から見て一番美しいところに人工的なものを造ってしまうことにより、外から見たときにみずばらしい景観にそれが変わってしまった。

台湾という国は以前はとても美しい島だったが、最近近代文明の発達に伴う様々な汚染物質の影響で、最も美しい島になってしまった。ごみ捨て場がな

なくなったので川に捨てたら、(川が)埋まってしまったなんて話もある。こうした水の汚染は深刻で、ある人に聞いたら台湾には魚の住んでいる川はないといわれた。

自らが破壊した水を、川を何とかしようと、以前ある試みが行われたことがあった。それは、人工的に河口を広げて、川の水を海にできるだけ流そうというもの。ある大学の先生のアイデアだったが、河口を広げたら、周囲に塩水が逆流してきて、大変な被害をもたらした。一度壊した自然は、容易に回復するものではないという典型的な例だ。

現在の日本の景観設計、まちづくりというのは時間というものが姿を消してしまっている。だから、歴史的に価値のある建物なども、邪魔だから壊してしまえということがよくある。

どうもそれは間違っているのではない。私の住んでいる長岡にも昔はお城があった。どこにあったのか調べて見ると、今は駅の下ということ。大変がっかりした。今は、別のところに新しいお城を建てようとしているらしいが、そこにあったから意味があったと思う。どうして造るのか聞いたら、お客さんを集めるからとのこと。そういう考えというのは計画でも何でもなくて、単なる思い付きだろうと思う。

これからは、時間というものを大切にしていかなければならない。思いつきや単純な発想で、景観づくりをしてはならない。先人たちのつくってきた歴史的な遺産を理解し、なぜそこにそれがあったのかということを考えることが、景観を考える上で欠かせないと思う。

懐かしい原風景オーバラップ

積極的に使われる施設に



建築計画工房
主宰
長谷川逸子氏

生活を楽しむ人たちがいる田舎で私は

育った。私の逸という字は、祖父が外国から帰ってきたときに独逸という国の子からつけた。祖父は私をよく海につれていってくれて、海を眺めながら、「すごく世界は広いんだ」と私に話してくれた。

海の近くで育ったことや大学時代のほとんどもをヨットハーバーで過ごした私にとって、海という存在は、身近で親しみやすいもの。

私の建築を海外の評論家は、よく陸の上の船と評する。最初は「私は建築をつくっているのだ」と、そのことをけなされているかに感じて主張していたが、私の建築の特徴とされる水に浮かぶような形態は、私たちの国の原風景の快適さと結び付くのだろうとだんだん思うようになってきて、そのことを逆に私は、建築の一つのコンセプトにしてよいのではないかと、思うようになった。

今、新潟では新潟市民文化センターの仕事を進めている。新潟市民の誇りであり、心のよりどころである阿賀野川のほとりに建設されるもので、私の提案はその場所にあった懐かしい原風景をオーバーラップした。市民の側に積極的に使われるような施設を思い描いた。

そこに、その土地に生きている人が中心にいる場ができるということが私の望み。これから皆さんの支援を受けてそうゆう場がつかれるように努力していきたいと思う。

海に対する関心が消えかかっている

尊敬と畏怖が文化の根幹



新潟大学教授
樋口忠彦氏

海というのは昔から、歌に詠まれるなどして、人々に親しまれてきた。

「浪速の海」とかいった具合に、その地域の名勝、景観を表す歌枕として、古来より海に関する言葉は用いられてきた。その中でどんな言葉がよく用いられたか

という一番多いのは「浦」、次は「島」「浜」「崎」、その次は「江」「磯」「海」。

それを見て感じるのは、海というのは何も無いところだが、目につくところや自分たちが停泊するところに関する場所が多いということ。すなわち沿岸の景観というか沿岸域が多く描かれているということ。身近に行ける部分が多かった。昔の人はどんな思いで、海を眺めていたのだろう。

海というのは、こうした人々の親しみという面をもつ一方で、宗教的感情というのか、常世の国、母の国、浄土がその果てにはあると考えられてきた。生命のふるさと『海』、生きていくための糧を恵んでくれるということ、昔の人は先祖が贈ってくれるものだと考えていたからではないか。そんな海のかなたに、人が思い抱き続けている風景こそが、心のふるさとではないか。

昔の人は、海に関していつも尊敬と畏怖の念を抱いて、接していた。それが日本の文化の根幹にもなっていたと思う。最近、そうした海に対する関心が消えかかっていることについては残念。海と人の関係を改めて考えてほしい。





新潟県土木部都市整備局
建築住宅課 参事
TADAO HIROKAWA
広川 忠夫

'95新潟シンポジウムを開催して

「海と景観」をテーマにした日本建築美術工芸協会（芦原義信会長）主宰、新潟県及び新潟市共催の「'95新潟シンポジウム」が6月9日、遠山文化庁長官をお迎えし新潟市内のグランドホテルで建築家や工芸家、デザイナーなど約600人が集まって盛会に行われた。

シンポジウムでは、新潟県知事（出納長代理）、新潟市長の挨拶に続いて遠山長官が「文化、そして海を考える」と題して講演、「海は恋人たちが語り合う背景にしかなくない。先人が海から学んだ文化を大切にしていきたい」と話された。

建築家、大学教授など5人によるパネルディスカッションでは、司会の内井昭蔵・同協会副会長（京大教授）が「ウォーターフロントなどの開発は、経済中心で環境、景観まで考えていないものが多い。景観に焦点を合わせて、海と人間の関係を模索したい」と述べた。また、豊口協・長岡造形大学長は、自ら海外視察に行った際に撮った写真をスライドで写しながら「海がよく見えるように建てた

建物は、海から見ると景観を損ねているように見える。海からの視点で考えることも必要でないか」と提言、参加者からは「建設と自然環境との共生」という難問が出されるなど景観をめぐる活発な議論が展開された。

会場には建築・建設業界や県、市の関係者にまじって、工業高校生やデザインの専門学校生徒、大学生や一般市民らも姿を見せ、パネリストの話を熱心に聞き入っていた。

当日朝は雨模様で、長官のお迎えをはじめ県内外からの参加者の足元を心配したが、幸い、昼間近になりさわやかな初夏の日射しとなり受付を前に一安心したところであった。

会場は遠くに越後の山々を背景に街を包み込むようにして流れる信濃川と新潟のシンボル万代橋を彩る何隻かの白いヨットを目の前にまさにウォーターフロントに位置し水の都新潟の一端を感じていただけたと思う。

今回の共催依頼にあたって、テーマが

景観であることから都市景観形成の企画所管の都市計画サイドとキャッチボールがあったが著名な建築家の協会であり予算措置や運営等から建築サイドが適当であろうということで市とも建築行政所管課が担当することとなった。

会場の設営やら実際の細かい段取りは大部分新潟市にお願いし大変ご苦勞をお懸けしたところである。

主催の協会が文部省の認可団体であることから、その対応に困惑しつつ協会事務局の助言を得ながら最後のつめの打合せを前々日に行い準備万端シンポジウムを待つまでとなった。

しかしそのころ、オウム騒動のまっただなかの霞が関では長官の出席も含めた身辺警護について相当の検討をされた模様で新潟到着時間を遅らせるとの連絡が舞い込み、急遽スケジュールの調整や警護の強化等再度打合せに飛び回ったところである。

翌日はこの新潟を育てきた母なる日本海の視察に相応しい快晴であった。





新潟市都市整備局開発建築部長
AKIHISA TŌJŌ
東條 昭久

'95新潟シンポジウムを開催して

日本建築美術工芸協会の伊藤事務局長から、来年新潟市で'95新潟シンポジウムを開催したいとの連絡がはいったのが昨年の5月の初旬であった。その年は5月13日に彦根市で'94滋賀・彦根シンポジウムが開催されるとのことで、さっそく市の職員を彦根市のシンポジウム会場へ調査視察に向かわせた。

約700人も参加者があり大変盛況であったとの報告を受けて、本市での開催に賛同し、協会から開催の協力依頼並びに共催依頼を受け、これを承諾した。

会場や期日等について協会の伊藤事務局長と再三にわたり協議をし、期日は6月9日会場は新潟市のシンボル信濃川と万代橋が一望出来る新潟ランドホテルに決定した。

テーマについては日本海側の拠点都市新潟市に相応しい「海と景観」に決まり、日本海に沈む夕日をイメージしたポスターの作成にとりかかった。

シンポジウムの企画立案も決まり、本年4月末日にはポスターやリーフレットも刷り上がりいよいよ実施段階にはいった。

まず第一には、いかにして多くの人を集めるか、その手法として関係する建築団体や国、県、市の行政機関並びに学校関係にポスターの掲示とシンポジウムへの参加を依頼し、参加人数も前もってお知らせ頂くようお願いした。また、一般市民への呼びかけとしては地元紙の新潟日報と新潟市発行の「市報にいがた」に掲載し、さらに、新潟駅の東西連絡通路などにもポスターを掲示して広く一般市民への周知をはかった。

シンポジウムの日が近づくにつれ依頼しておいた団体や学校から参加人数が報告され事前に500人以上の参加者が見込めることになった。また、一般市民からの問い合わせもあり、当初予定した600人をはるかに越えることが予想され、急ぎよ座席を700人分に変更した。当日は予想されたとおり700席がほぼ満たされ、特に注目されたのは工業高校の生徒が授業の

一貫として40名参加したことであった。後日教諭から「著名な先生方のお話しが直接聞いて大変勉強になった旨生徒たちの感想があった」と連絡がはいった

また大学生や専門学校の学生の姿も多数見られ盛大なシンポジウムとなった。

私自身も、文化庁長官を初め、日本を代表する建築がご専門の諸先生方のお話しを直接聴聞でき、感激した次第である。

交流の集いへも多数の参加があり盛會に執り行われたことは大変喜ばしいことであった。

パネラーの先生方は、大学生や市民の人達といろいろ意見を交換したり、名刺を求められたりしておられたが、持参した名刺がすっかり無くなり、もっと持ってくればよかったと残念がっておられた。僅か1時間の交流会ではあったが参加された皆さんが有意義に過ごされたことと思っている。

協会の会員の方で翌日、新潟市内を見学された方もおられたが、新潟の海の幸が大変好評であったとのことを担当から報告を受け安堵した次第である。

来年は北九州市でシンポジウムが開催されることに決まり、北九州市の職員の方がお見えになっておられたが、なんと言っても取り込み中のところ十分な説明ができなかったことをお詫びし、'96北九州シンポジウムが成功されるとともに社団法人日本建築美術工芸協会がますます発展され、ご活躍されることを祈念いたします。



NHK・ディレクター
TAMOTSU KOIKE
小池 保

'95新潟シンポジウムに参加して

私は、記念講演やパネル討議、そして交流の集いのそれぞれが、スムーズに進行するよう司会進行の役割を担わせていただいたおかげで、シンポジウムの内容に密着できる役得にあずかれました。

「海と景観」という大きなテーマについて、自分なりの見方を前もって整理し、それを枠組みに、話の展開を素人なりに咀嚼しようと、ある程度考えはしましたが、なかなかまとまらず、モヤモヤした中途半端な気持ちで新潟駅に降り立ちました。

新潟に着いて駅からバスで会場へかう途中、万代橋を渡りながら、ふと信濃川の河口方向に目をやりました。私は昭和58年の夏まで、新潟の放送局で3年間勤務していましたが、その頃は、川がただデレッと海の方向に向かって広がっているだけで、とりたてて特徴もない河口風景でしかなかったように思います。

しかし10年あまりたった今、そこには何隻かの小型ヨットが繋かれ、海に面した都市らしい、落ち着いて健康的なリゾート感覚を醸し出していました。

なるほど、新潟は今、こういう面も大事にしようと考えているんだなと、私なりに納得しました。

その時に、私の中でモヤモヤしていたものが、あるかたちをとって意識されました。

「景観」とは、「自分たちのまちは、こういうあり方を大切に考えているんです」というメッセージが、具体的な形態となったものなのかな、と感じたのです。それは、「景観」ということばに含まれる意味合いの、ほんの一面という程度のものでありましたが、それなりに納得がいく考えでもありました。

そこで私は、シンポジウムのテーマを理解するための、自分の中の小さな枠組み、尺度として持っておくことにしたのです。

これで、シンポジウムに対する私の楽しみがまたひとつ増えました。

つまり、私のこの考えが、シンポジウム



広報委員
南北村孝昭広告事務所
TAKA AKI KITAMURA
北村 孝昭
名古屋市中央区3-27-33

「山を背にして」

の展開によってうっちゃられる、その小気味よさ、見事さを楽しむ気持ち——ややマゾヒスティックな楽しみが加わりました（そういえば、新潟には、サドという名の島もありました）。

果たして、この粹組みの有効性への期待は、爽快に裏切られました。それどころか、「景観は、そこにある生命を大切にすることからしか生まれえない」という主張や、「良い景観には、時間（歴史）が組み込まれている」という指摘などを聞いて、ある種の恥ずかしさすら感じました。河口にヨットハーバーの取り合わせに、景観のひとつの意味を見ていたという、何という狭小さ！

今回のシンポジウムでも、建築というものが、いかに幅広い世界観の模索の中で創造されているかを、改めて知ることができました。又、シンポジウムのその他のお話からも、私の仕事の上で役に立てられそうな事柄を、たくさん仕入れることができました。

少しキザに構えて説明すれば、司会進行という立場の意味は、自分なりにその内容を生きようとする事です。平たく言えば、人よりも良く聞く（Hearではなく、Listen to）ということであり、良く聞けるという立場だと言うことができます。この役得は、なかなか人に譲れるものではありません。ですから私は今、この収穫を自分の仕事にゆっくりと役立ててゆきながら、早くも次のシンポジウムの機会を虎視眈々と狙っているところなのです。

あの頃はまだ豊かではなかった。

それでも、そろそろ余裕も出来て、通される社長室には絵の一枚ぐらいは掛けられていた。

その多くは何故か山の絵であった様に記憶する。

昨今は、一様でなく、高価な絵が計算されたい場所に飾られていて、通された客は「いい絵ですね」の一言も言わねばならない様に出来ている。

話の糸口には好都合かもしれない。

「この先生の絵は、ずいぶんとお高いでしょう？」「いや、買った当時はともかく、今はまるで駄目です。ハハハ」。不謹慎と言われようと何と言われようと、直ちにお金に換算したがるのが、戦後50年で培ってきた日本人の悲しい習性。そう目くじらを立てることもないといわれればそれまでのこと。

それにしても、当時の絵は何故「山」だったのか——

考えられることは、無難だからという、ただそれだけの理由で、秘書室あたりが適当に選んだケース。そして次は、社長が特別の想いをもって固執した場合。

青雲を胸に抱き、都会に出て来て頂点を極めた社長が、兎追いし頃を懐かしみ、その絵に自分の少年期を投影し、親しんだとしても不思議はない。ただ島国のわが国において、ひたすら山に見入るといことは、海に背を向けている姿にほかならない。

戦後の日本人が、海を意識し始めてそんなに時間が経っているとは思えない。「皆さん、土地はいくらでもあるんですよ！」と、時の総理がダミ声を上げれば、西の経済人が「六甲の土地を持って行って、瀬戸内海を埋めたらええんですわ」と応えた。

人々は、その構想をたたえ、無茶とは考えなかった。やがて、ウォーターフロント開発の言葉が生まれ、全国至るところで、今度は山を背にした。山では、グリーンは美しいが、蟬の声もなく、トンボの姿もない不気味な静けさ

を持つゴルフ場がいくつもでき、海辺では、まるで生態系を無視した作業が追い立てられる様に進められた。

少年期を四国の松山で10年近くを過ごした私は、毎年、夏には小島に渡り、海に親しんだ。学校からの半強制的な楽しいキャンプ生活だった。

海辺の砂利を洗う、優しいさざなみの音は、今でもはっきりと耳に残っている。その水の美しさも忘れられない。30数年も前のことである。

池田武邦先生が悲痛な想いで語られた、生態系が無視された瀬戸の海を見るのは辛い。

7月20日の全国紙の各紙上に我が意を得たりの広告を見て、思わずヒザを打ち口元がゆるんだ。

全七段、新聞は15段に区分されているから、約半分、大きなスペースである。広告主はあの財団法人日本船舶振興会。ヘッドコピーが飛び込んできた。

そういえば、海について考えたことなかったなあ、である。

そして、来年から7月20日は祝日「海の日」となりますと続いていた。

それぞれの人や団体が海をどう考えようどう付き合おうと勝手といえば勝手であるが、海が泣けばやがて、人間が泣くことだけ間違いのないこと。それも、ずっと後の人間が。

開発好きの日本人のこと、海辺から海底へ、ますます開発の意欲は燃えたぎり、止まることはないであろうが、恐れを知った開発であってほしいと秘かに願う。それとも、自然は人間の悪戯なんかでどうなるものでもない大きな存在であって、くれれば幸いである。



建築家
池原義郎・建築設計事務所
YOSHIRO IKEHARA
池原 義郎
新宿区大久保2-11-19 第十松田ビル
TEL 03-3209-4300



建築家
日本大学生産工学部教授
総務運営委員長
MAYUMI MIYAWAKI
宮脇 檀
(有)宮脇建築研究所
東京都渋谷区代官山町4-1
代官山マンション107
TEL 03-3464-9600

私の近況

つい、この数日前（7月9日）、市立の北九州大学の中心となる建築が竣工した。この設計にこの数年をついやして来た。これは既存のキャンパスのリニューアルのための最も中心的なものであった。

設計の前にこの大学のキャンパスを初めて拝見したとき、市の都心部と郊外部が相接するところであり、また、都心と郊外を結ぶ交通幹線に直接な関係を持ち、朝夕に流動する市民の目に、そのキャンパスの全てを開いていた。そして、大学を取りまく街そのものと一体化しているようであった。それは、研究と教育の府として、街から切り取られた独立性ではなく、街と市民と一体化された或いは市民の日常と大学の日常が連続している大学であるように思えた。市立である大学の本来あるべき姿が偶然出来上がっているように見えたのである。単なる文化・学問の象徴としての大学にとどまるのではなく、街と市民に開かれた、都市と一体化した大学であると感じてしまった。

今回、新棟の設計に対し、市及び大学側が私に示した与条件は十分にこの考えを示しているもののように思えた。この一棟の建物に、研究棟、教室棟、体育棟、或いは学生、教員、職員、そして時に市民が日々交流する大学センターといった多様な機能を複合しているものであった。このこと自体が都市性を備えているといえよう。その意味でも、街と一体のものであると思えるのである。単に象徴性を超え、若者と教員と市民が渦巻く立体的広場であり、この生き生きとした学問と教育の活動が展開することを想わせるもののように感じた。

この建物の前に大きな彫刻を建てたいと思い、ニューヨーク生まれでヨーロッパとアメリカを中心に活躍している、ピヴァリー・ペッパーさんをお願いした。大地と自然を舞台とした都市的イメージに独創性と独特なコンセプトで世界的な評価を集めている彫刻家が、この大学のために制作をして下さることになり大きな期待とよろこびをもってこれが建つ日

を待っていた。

北九州ポリジェネシス（多元発生説）と題する高さ25mのコルテン鋼の作品が5月に現地に建てられ、「地球上の様々な文化、言語、洞察力を共通の声として一つにまとめた」という全世界の願いに基づいて制作しました。「北九州ポリジェネシス」はその形とコンセプトにより、世界の多様性と統一性への理想を、二つに別れた異なる柱が一本の塔となって目標をめざす心を表現し、それは二本並んでしっかりとそびえ立つ記念塔になるのです」と言葉を送って下さった。

建築は、それを使用する人々、それを眺める人々、それがあがる街の人々、それが建つ大地に住む人々、その人々の心に無言の語りかけをし、感性に共振し、豊かさを贈るものでなければならぬ。その意味に於いて、建築は芸術であり、文化の証でもある。そして彫刻、絵画のような純粋芸術との共演を得て、その建築の文化的役割は高く増幅される。ペッパーさんの作品はこの大学の建築の心を見事に囁きあげてくれた。

この大学の教授の一人が新聞に語ったことが記事となった。「彫刻などに5千万円の公費を使うとは同意できない。5千万円の公費が使えるなら、それで図書館の本でも買うべきではないか」と……

建築美術工芸協会が行うべき役割はまだ多い。

総務運営委員会が動きます

会長の芦原さん、副会長の内井照蔵の2人のコンビからは、旧建築家協会時代から、何かにつけ仕事を押しつけられ、引きずり込まれてきた。

aacaも同じパターンで入会させられると、総務運営委員、そして委員長、そして直ちに理事と、ベルトコンベア的に押し流されてきた。

それを言い訳にする訳ではないが、始めしばらくは会の内容そのものが良く理解できず、云ってみれば不良、冬眠会員の一人だったと思う。

けれど運営委員長も2期目、やっと会の全容と問題点も少しは判かってきた。

（ということは私一人が何かして出来ることではない部分が如何に多いかが判かったということでもあるのだけれど……。）

どんな会でも皆問題があって、参加のメリットがあつたりなかったり、多かつたり少なかつたりするのは当然。メリットの多少で会を論じるのはしたくないが、せめて入って良かった、位は思える会でありたいと思う。

この会の構成メンバーの多様さは信じられない位巾が広い。この人達と何らかの型でおつき合い出来るようになれば、それだけでも大変なメリットだろう。

人々が混じり合うにはその容物である会をゆさぶるだけで良い。総務運営委員という委員会は、その為に会を色々ゆさぶる事を考えるセクションであろうと思う。次々と何か考え出し、それを次々と会員の皆さんに処理、解決していただく（いただくという所がミソ）。景観テーマであろうと、委員会、シンポ、勉強会其の他、あらゆる運動を考え、皆さんに協力の依頼、指名をし、それで会員同志のブラウン運動が盛んになり、会の活性化が実現する——という身勝手な方向を委員長としての私は考えているのだが。

どうぞ会員の皆様、総務運営委員会から何かお願いがあった時には、楽しい結果になるのだと思い、ご協力下さることを。



東京都写真美術館館長
TAMON MIKI
三木 多聞
東京都北区中里3-10-2
TEL 03-3910-2637



茨城県近代美術館館長
SADAO KATO
加藤 貞雄
水戸市千波町東久保666-1
TEL 029-243-5111

私の近況

この四月に東京都写真美術館の館長に就任し、徳島県立近代美術館と二つの美術館館長を兼任することになった。東京都写真美術館は日本では初めての写真専門の美術館として1月20日に開館した。

近年、写真や映像に対する関心は急速にひろまりつつある。美術においても写真や映像をとり入れた表現が増大し、美術と写真との領界は判然としなくなり、クロス・オーバーな状況になっている。それは写真製版をとり入れた版画が盛んに制作されるようになってきているというようなことばかりでなく、写真と美術がさまざまな形で複雑に入り組み、美術の表現領域をひろげているといっている。そうした状況を反映して、各地で活発に活動している美術館の中で、写真に関する展覧会を開催したり、写真をコレクションしたりするケースが多くなっている。写真を専門とする美術館という要望はかなり前からあったが、それがようやく誕生したわけである。

写真を収集し保存し整理して、展示し、そのための調査研究を行うという美術館としての役割はもちろんであるが、国際交流のセンターとして、また新しい写真の展開をバックアップする拠点として、写真美術館がとり組むべき未知の領域は大きい。可能性をもとめるのは大きな魅力であるが、基礎づくりをじっくりと手がけなければならない。現在開催中の第1回東京国際写真ビエンナーレ展もその一つであるが、PRが充分とはいえなかったにもかかわらず、57か国から1800点の応募があったのは、関心の強さを物語っている。

ところで日本建築美術工芸協会も既存のジャンルの枠を超え、クロス・オーバーな領域に挑戦しようとするところが、大きな魅力である。

私の近況

全国美術館会議という組織がある。県立、市区町村立、私立、大小さまざまな美術館が、情報交換や親睦を目的に集まっている。参加しているのは、ことし6月の時点で291館。まだまだ美術館の建設が進んでいるので、来年には300館に達しそうだ。

1952年に、加盟館26館でこの組織は発足した。前年に、日本で初めての近代美術館として、神奈川県立近代美術館が開館したのがきっかけだった。この年はまた、東京国立近代美術館が開館した年である。この2館で、ようやく、日本も、専門のスタッフがいて、調査、研究を行い、独自の企画を立てる、美術館らしい美術館を持つことになったのである。

それ以前にも、東京都や京都市、大阪市などに公立の美術館がなかったわけではない。しかし、それらは、主に団体展などの会場として使われていたのであって、実態は貸しギャラリーであった。つまり、美術館という名称にふさわしい美術館は、前記2館ができるまで、明治以来、この国に存在しなかったのである。それを思うと、行政主導の公立館を多く含む美術館が、40数年間で激増したのは大変なことである。しかも、その大半は、近々15年の間に建ったものだ。

要するに、日本の美術館活動は、まだ始まったばかりといえるだろう。急激に増えたため、経験を積んだ学芸員が少ないし、予算も乏しい。それでも、それぞれの美術館は、行政や地域との折合いに努力しながら、展覧会企画やワーク・ショップなど、いわゆる教育普及事業に取り組んでいる。

この“教育”というのに、私はひっかかるものを感じている。たいいてい美術館は「教育施設」と位置づけられ、生涯教育の場となることを求められている。しかし、美術館は断じて学校教育の補完施設ではなくて、スタッフ挙げての“機能”であり、それも教育というより文化の創造の担い手としてのものではなくてはならない。その意味で、美術館とaaca

との間には、おおいに接点がありそうだ。そこで、もてをかけずに、面白い情報やヒントをaacaから盗めるなら、こんなうまい話はない、と私はほくそ笑んでいる。





設景家
調査研究委員
株東京ランドスケープ研究所代表
HARUTO KOBAYASHI
小林 治人
東京都渋谷区神宮前1-16-4
TEL 03-3404-3601

「園を造る」道

地球規模で環境を考える時代になって、ランドスケープ・造園への関心が高まりを見せている。ランドスケープは15～16世紀に画家のテクニカルチームとして用いられていたものが、地図の発達と共に地理学の用語としても盛んに用いられ、造園の計画・設計のセンスで用いられることが定着したのは19世紀になってからである。しかし、20世紀末の今、ランドスケープの概念は、自然環境から都市などの人工的環境に至る広い対象にわたって用いられるようになって、従来の造園とは異なる概念であると言う趣旨の論が目につく、日本における造園はその奥行きの高さよりも、空間的序列、経済的規模などによって理解され、巨大建築

物などの外構処理技術としての付属的理解が一般化されつつあるように見える社会現象がもたらした理解と受け止められるが。最近まで専門家間で使用されて来たランドスケープが社会的に普遍化しつつある今、ランドスケープの目指す空間が園を造る事にあることを意識して、園について考えてみた。

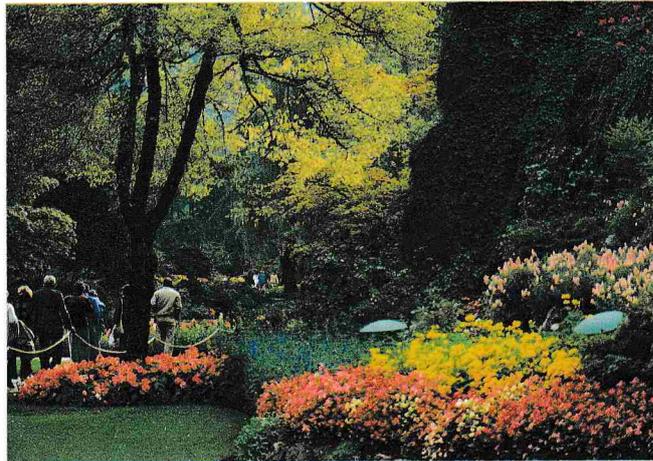
環境が意識されるようになって、良く用いられる公園都市、庭園都市、など園と名のつくところは、出会いの場所、自然や文化的知識の集積する場所であり、そこには人工的施設が程よく抑制されて存在し、規格化が困難な生き物の論理が基礎となって生活に喜びや、楽しみを与え、園で得られる知的な刺激によって、

新しい発想や命の活力が得られる。不規則で、一見曖昧に様々の分野のものを詰め込んでいる園は、学び経験する場所でもある。

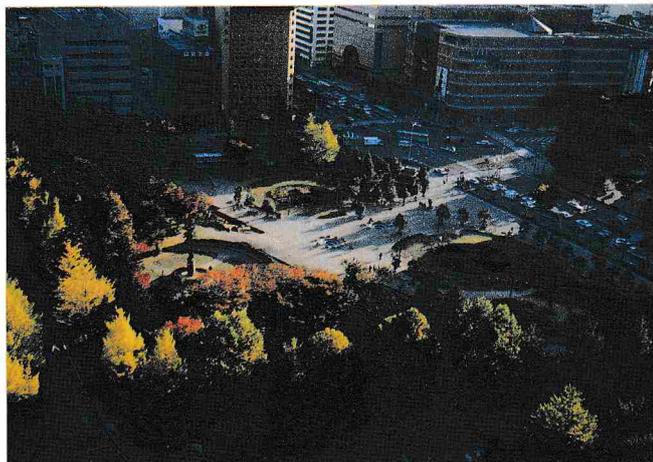
人間と自然の関係が生態学的、芸術学的に良く調和の取れた美しい空間となって出現している園に接して人々は、エデンの園、パラダイス、浄土などを感じ安らぎつつろぎながら活力を得る事ができると最近の精神医学者は言う。これらの命題に対して、我々が日常の仕事を通して夢を描き、社会の動きと共に生き、共に行動して、生きた園を造ることの可能性を求めて、伝染病のような都市問題や、社会的各種の軋轢に耐えて、『園を造る』道を歩む日々が続く。



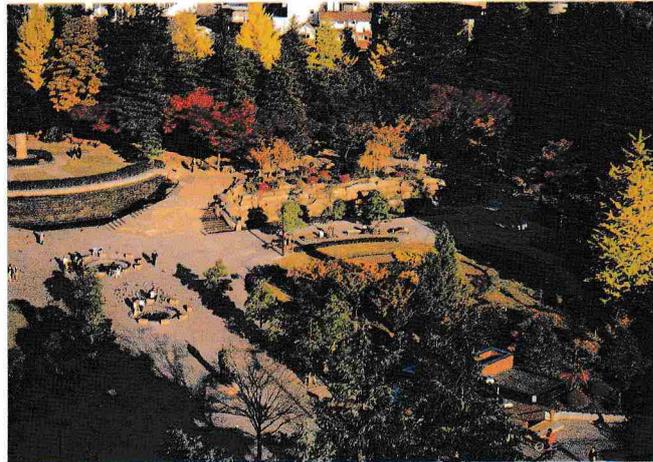
・20世紀初頭の石灰岩の採掘場であった空間が花の園へと変身した。



・プリティッシュコロロンビア ブッチャーガーデン



・季節の移ろいを都心に導入した広場



・仙台市句当台 設計TLA



株式会社OPAオバ代表 七宝焼作家 壁画専門
ASTUKO KITAMURA
北村 温子
東京都新宿区高田馬場1-18-18
TEL. 03-3200-7667

デザインは建築物のコンセプトを把握し統一性と連帯感を基本にする。同時に私の作品の特徴は手造りの人間の温もりと感性皮膚感覚をメッセージする為には色彩80色以上の絵付を一枚づつ10数回七宝焼窯で手焼で焼成。素材は銅板にガラス質微粉を乗せ800度窯で焼く。施行は特許申請の三重工法で震度7でも安全が検証済。作品の変色錆熱の耐久性は三千年と保証されているエジプト時代の技法で科学文明と人間文明の共生アートを提案。

「生誕 SEITAN」

設置場所：西新宿アイランドタワー(住都公団住宅棟入口)
1500mmH×1650W×35D(裏板含)

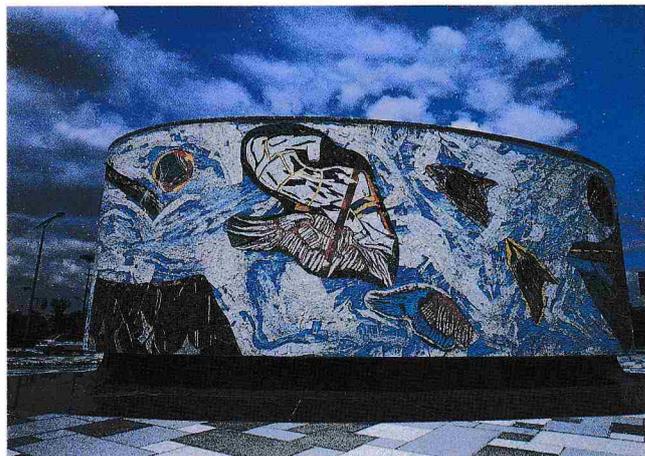


版画家
NORIKO YANAGISAWA
柳澤 紀子
浜松市東区4-20-12
TEL. 053-458-7519

人間の営み自然の摂理の接点をテーマに20万個のズマルト(焼きガラス)の小片を使い、モザイク作家工藤晴世との共同制作で完成したモニュメント。ガラスの光りと陰の部分が、刻々と変化し季節によっても表情を変え見る人に常に新鮮な発見を与えるであろう。

「分水嶺」

設置場所：浜松市都田アクノポリス
2300mmH×6000W×3000D(楕円柱)

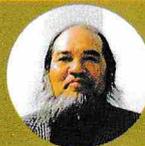


株エノモトアトリエ代表 建築彫刻
TAKEMI ENOMOTO
榎本 建規
東京都新宿区市ヶ谷仲之町3-14
TEL. 03-3351-6704

千代田区の総合文化施設として5月にオープン。その一階庭園ロビーのモニュメントとして制作しました。円筒は常盤松の透彫りで上部の鳩も共にアルミ鋳物のミガキ仕上げ。千代田区の歴史と文化の発展を表しました。

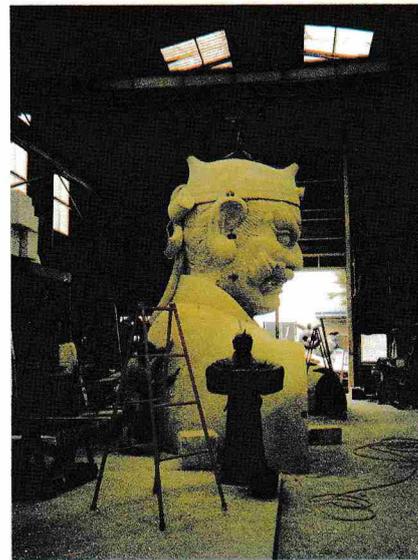


「松音頭 (まつおんど)」
設置場所：
東京都千代田区一番町
「いきいきプラザ」
2600mmH×500W×500D



日本彫刻美術株式会社 彫刻家
TAKASHI TANAKA
田中 高
東京都東久留米市滝山5-28-5
TEL. 0424-76-0375

大阪万国博以来岡本太郎先生の片腕として多くのモニュメント製作のみ手伝いを来ましたが、其の合間に私へ名指しの作品はなぜか歴史上の人物銅像が多く今回も隼の首領かとも云われる伝説の人弥五郎銅像の製作中です。完成は来春3月除幕の予定です。



「弥五郎銅像」
設置場所：
鹿児島県曽於郡
大隅町岩川
15000mmH×8000W×
4500D

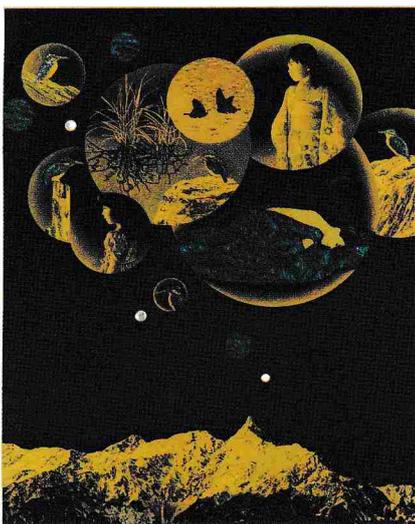
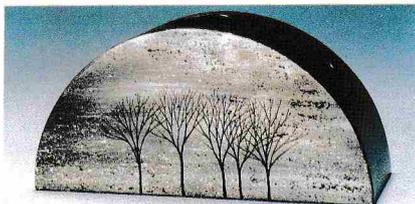


第67回 1995年1月20日
 工芸家
 TUNENOBU NAMIKI
並木 恒延
 東京都羽村市羽中3-14-34
 TEL 0425-55-1519

塗料であり接着剤でもある漆の話をすると、聞いて頂く皆さんには、やや理解しにくい素材だと思います。それは漆という材料が造形素材でなく流動体のある加工素材であるからです。何10工程にも及ぶ仕事、そして木や紙や布、プラスチックから金属、ありとあらゆる物との相互性から、端的に形が見えて来ないと言う理由からです。

漆液はうるしの木に刃物でキズをつけ採取する白色の樹液です。アジアモンスーン地帯にウルシ科の植物は何百種類もあるといいますが、日本でも、ハゼ、ツタウルシ、ヤマウルシ、ヌルデなどが自生しています。しかし私達が使用する日本の漆液は「うるしの木」のみです。漆の木も、掻き子と呼ばれる人達も減少し、現在99%中国産漆を中心に輸入に依存しています。

その漆の特質は、唯一直射日光には弱いものの、酸、アルカリに対しても防腐性があり防水性もあります。日本では石器時代にすでに、やじりと矢を蔓で結び漆で固めたことが知られ、また土器の表面に塗られるなど、最近次々と発掘される現状から見ても漆の堅牢性が証明されています。時代が移り、単なる接着剤から美術工芸的な用途に使用され、基本的



な技法は鎌倉時代には完成されました。桃山から江戸時代にかけては町人文化も拍車をかけ細工的ですらある精巧な技術へと進み現在に至っております。

漆塗りの工程を大きく分けると「素地」「下地」「塗り」「加飾」に分類されます。「素地」としては木材を中心にどのような物にも塗ることが出来ます。「下地」とは主に漆と土、のりなどを混ぜたものを器物などに塗って、堅牢平滑な面を作っていく作業です。そして下地が完成すると、いよいよ「塗り」の作業に入ります。下塗り、中塗り、上塗りを経て無地の器類などが完成します。塗りが上がった漆面に絵を付けることを「加飾」といい蒔絵、螺鈿、彫漆、切金など様々な表現技法があります。

私は漆の世界に入る時、一つ心に決めた事がありました。従来文様を中心としたパターン構成を否定し、描写的表現による叙情性の追求です。金粉のボカシを利用しデッサンをしている様な気持ちで空気を感じる画面作りです。白い紙に向かうのではなく、黒漆に描くのは黒板に白チョークで描くのと同じで、最初はまごつくこともありましたが、スケッチなどは怠りませんが、たまに白い画用紙が眩しくさえ感じます。それは黒漆に向かうことが日常になったということです。

漆は扱いにくい、高価である、カブレるというマイナーなイメージをいだかれる事が多いのですが、これからも、日本人の身の回りに普通に存在していた漆、すなわち小文字のJapanに注目し、見守っていただければ幸いです。



第68回 1995年2月17日
 刺しゅう作家
 株式会社久家道子エンプロイダリー
 MICHIKO KUGE
久家 道子
 東京都中野区弥生町4-34-8
 TEL 03-3381-1151

刺しゅうと共に40年

世界の刺しゅうの旅

何時の時代にも刺しゅうは服飾に室内装飾に又はおしゃれな持ち物などに多くの人達に愛され、親しまれて今日に到っています。ヨーロッパ・アメリカ・アジアの美術館の所蔵品の中にも実に多くの種類に亘る格調の高い作品を見る事が出来ます。英国のロンドン・ケンジントン区のピクトリア・アンドアルパート工芸美術館は中でも最も多岐に亘って数多くの立派なコレクションを公開して呉れる美術館です。私の生涯にとっての偉大な師として尊敬しています。25年もの昔、毎日歩いてその美術館の2階に3000点餘り保存されているであろうピクトリア時代を中心とした刺しゅうの部屋と隣接している200年~300年以前に作られた人の業を超えて神様の手によるものと思えない美しいレースの部屋に通いためにケンジントン区のクロムウェル、クレセントの2階フラットを買ってしまいました。勿論、日本での仕事は当時から忙しく、毎日の様に指導の為に刺しゅうの教室に通い、作品デザインに明け暮れし、子育てや家庭もおろそかに出来ない環境でしたが、私の性格は実にいい加減で、便利に出来ていましたので、毎日々々せせせと気持ち丈は、美術館と骨董屋等、ロンドンの中を歩き廻らせておりました。その様な中から年に2回~3回はヨーロッパ他、外国を訪れる機会に恵まれ、仕事を通して“欲と二人連れで”自分の好みのアンティークの刺しゅう・レース・ガラスや装身具を少ない予算の中で一生懸命買う楽しみを覚え、出来るだけガサガサと密度の高い物にしぼり込みました。フランスのみの市で安く交渉の上我が手に入れた19世紀の貴婦人のステータスシンボル「カシミアショール」。タッチングレース(手法)で編まれた、これ以上細かいレース糸は無い位の精巧なメダイオン(丸型)を千個つないだカトリックの祭礼用のテーブルの縁取り。十字架をモチーフにゴブラン刺しゅうで刺された僧衣の部分や聖書の上、聖餐式用の小物や縁飾りテープ等行く度毎に益々エスカレートし、こちらの見る目も確かなものになってゆきます。

貴重なコレクションは全て参考資料として役立っています。

小学生時代を中国山西省太原で過ごした経験をもつ私は、'78年度から中国の政策がやや自由になったので、刺しゅうを教え、注文する為にせせせと年に4回づつ訪中しています。北京大でも60回余



りになり、フォーマルバックから小さなブローチ等の作品に仕上げる為、200年余り昔、ロココ時代、ハプスブルグ家よりの歴史を伝えるブチポアン刺しゅう（ゴブラン刺しゅうの中でも最も精巧）が活かされています。

NTTの手づくり刺しゅう電報として約5年前から日本中に慶びのメッセージをとどけてもいます。祖母と母が刺しゅうを教える中で育ち、戦前、羽仁もと子先生の自由学園に入学し、昭和27年から3年間、恵まれて当時は国外へ出るチャンスが少ない時をチリの公使館で過ごす事が出来たことは、40年も刺繍一筋に自信をもって仕事が続けてゆける原動力と感謝しています。

集めた刺しゅうやレース等私にとって価値ある作品は地方展や講演会など機会ある度に出来るだけ多くの方々に見ていただいて本物指向の時代を迎えた今、楽しく、豊かな主役としても活躍しております。



第69回 1995年3月17日
東京芸術大学美術学部長
KIICHI SUMIKAWA
澄川 喜一
東京都清瀬市上清戸2-14-12
TEL. 0424-91-2150

『こゝろ』の開発利用

以前、米国の若い彫刻家が芸術大学に留学生として在学したことがあります。彼は日本の文化に強い興味を持っていました。来日間も無い頃私と一緒に懐石料理で日本の夕べの一時を楽しんだことがあります。

丁度その時の膳に孕箸が付いていました。私の少年時代、元旦には質素ではありましたが、母が心を込めて作った御節料理に必ずこの孕箸が添えられるのが常でした。

ご存知の方が多いと思いますが、箸の中央がふっくらと脹らんでいるかたちの箸で、母の手作りの千代紙の帯で二本が

きちんと纏めてありました。それぞれの箸の両端を左右に引けばきれいな帯を切ることなく箸を抜くことが出来ます。両端が細くなるように削ってありますので持ち換えるとさえ箸（添え箸）になる訳です。

毎年お正月の習わしになっており子供心にご馳走の時は孕箸がつきもの思っていました。

中太のかたちは米粒の楕円形を細長くのばしたかたちで、柔らかく、ふっくらと孕んだかたちは実りを表わし、お祝いの膳にふさわしいことや、持ち換えれば二通りの使い方がある素敵なデザインであることや、日本人の木に対する歴史的な感性の良さを話しました。

日本には飛鳥時代から世界に誇れる木の彫刻（仏像）が数多くあります。仏像の多くは彩色仕上げしてありましたが、平安時代になり、檜材を使用し始め、木そのものの美しさを大切にしていたことや、また生活様式は木造りの住まいで畳や障子、襖、身体には木綿や麻を着け、植物を中心にした手造りの空間で生活して来たこと、等々、話に花が咲きました。

彼は2年間の留学中、各地を訪ね日本の美しさに関心したり、不思議がったりしながらいろいろな種類の割箸を収集しました。

帰国のとき「私の日本での研究成果はこの箸です」と笑いながら大きな箱一ぱいの箸を見せてくれました。私も初めて見る素敵なデザインの箸が沢山ありました。彼はアメリカで日本の不思議さを考え続けていることと思います。

木の割箸は資源の無駄使いだという説や、植林の間伐材なので切られた木の再利用だという説もあるようですが、客人を持って成す食卓で主人が庭に降り立ち、庭木の枝を切り、自然の枝のかたちを見事に活かした箸を即座に造った話など、日本人は自然の総てのものに命を感じ畏敬のこゝろをもち、利用するのではなく活用していたと思います。

素戔鳴尊が雲の上から木を植えました。

眉の毛を抜き放つと樟に、髭を抜き放つと杉に、胸毛を抜き放つと檜になったといいます。下（しも）の毛は槇になったそうです。樟や杉は舟を造れ（杉は箸や食物の用器に）、檜は建物に、また槇は棺に、と数多い樹種の中から適材を適所に使えという教えになっているそうです、日本人の木に対する「こゝろ」は素

晴らしいものがあります。

明治以後美術の教育も御多分にれず西欧の技術の勉強が主流でしたが、芸術大学106年の歴史を見ますと、外国一辺倒にならず「日本のこゝろを忘れるな」という天心以来の伝統の流れがあるようです。

現在も続けられている必修授業で、三年次の学生は半月余り奈良京都などに出かけ、日本の古美術の研究旅行を行っています。

飛鳥時代の樟の彫刻（仏像）や、平安時代以後の檜の彫刻を拝観し、多くの障壁画や建築を研究しています。

一昨年は特別の計らいで東大寺南大門の仁王像の修復現場を拝観させていただきました。

大きな像が解体された現場は体内の木組に残る荒々しい鑿跡や当時を思わせる墨跡など鎌倉時代の熱気が立ち登っているようでした。学生達の息を詰め、目を輝かせて真剣に見入る姿には神々しいものがありました。

この研究旅行は千年を越す先達の知恵の素晴らしさを知ると同時に匠達の巧みに触れることは勿論ですが、本ものの「こゝろ」に出会うことがいかに自分の感性を磨く上で大切であるかを知る旅でもあるのです。

『仏つくれど霊入れず』といいます。本当の芸術とはかたちある作品に心を入れる難しさを知ることでもあります。

しかし、芸術とは、特別のものではなく、人々の生きざまが人それぞれの芸術なのです。

才能の「才」は生き続け広く学ぶことと云われます。また「能」は学んだことを活かす行動力だと云われます。自分自身を生み出すために自身を見詰める力の総合力が「才能」であり「個性」と云えるのではないのでしょうか。

また、個性は作り上げるものではなく、じっくりと発酵させ醸し出されるものようです。日本の個性は先達の知恵を学び、次の世代に伝承し、新しい創造へと継続する力であり、「こゝろ」ではないのでしょうか。20世紀はあまりにもスピードが早く「こゝろ」を何処かに積み残してきたようです。21世紀は経済大国の声ばかりでなく、日本の由来と未来を思考した文化と云うもう一つの日本の個性ある顔を持ち、本当の文化国家日本としてこゝろある知的技術の開発利用が期待されているのではないのでしょうか。 

EVENT

「水・緑・光-ヒトの集う空間」展
～海外にみる都市の環境芸術～

- 会期：1995年8月31日(木)～
9月26日(火)
- 場所：東京ガス・銀座ポケットパーク
2Fアーキテクトスタジオ
東京都中央区銀座7-9-15
TEL 03-3572-5555
- 主催：東京ガス・銀座ポケットパーク
- 監修：樋口正一郎氏（造形評論家）
- 入場：無料

「街づくり」「都市づくり」への関心が市民の間に高まってきています。なかでも「文化的な生活環境を」という声が多く聞かれます。経済と文化の両立した欧米の都市に比べ、経済優先だった日本の都市文化づくりは、やっとスタートしたばかり、といったところです。



写真：GEORGES POMPIDOU CENTER ポンピドーセンター

觸露やへびや大きな唇、そしてスクラップの車輪などがプールいっぱいに広がり、音をたてて水をまき散らし飛ばす。パリの中心、ポンピドーセンター橋にニキ・ド・サンファールとジャン・ティン

東京ガス・銀座ポケットパーク「水・緑・光-ヒトの集う空間」展は、都市文化の先進国、欧米がいかに自然と共存しながら美しい街を維持し、つくろうとしてきたか、水と光そして緑の溢れたなかで人間の創造性を育む都市環境をいかに築こうとしてきたか、それらを環境芸術の写真を通して見てみようというものです。

会場では、世界各地の都市の過密化や老朽化に対する美術家による環境開発の試みとその成果のほどを写真パネルで紹介。いまや都市づくり、街づくりに欠かせない存在となった美術家たちの最新の活動を参考に、日本の都市環境づくりのあり方を考える場となります。

なお、期間中、4回のスライド会を実施、欧米の都市がどこに向かい、どのような都市像を模索しているのかを探ります。

ゲリーのカーニバルが仮装舞踏会といった造形が、原色と派手な動きで愛嬌を振りまき、沈んだ色の町に新しい血を送り元気づけている。（樋口正一郎）



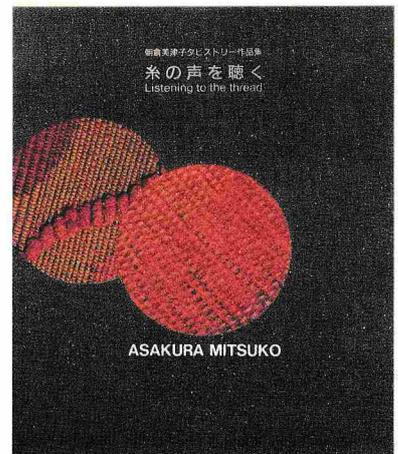
BOOK

京都在住の当会会員染織作家、朝倉美津子さんのタペストリー作品約40点を収めた作品集、「糸の声を聴く」が出版されましたので御紹介します。



朝倉美津子

〒610-2 京都市西京区大枝西新林町
六丁目十の十八
TEL・FAX (075) 331-2763



書名：「糸の声を聴く」
著者：朝倉美津子
定価：3,800円／ふたば書房刊

発行：観日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax 03-3457-1598
〒108 東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦

玉見 満(委員長)、大田了介、北村孝昭

坂上みつ子、崎山小夜子、高部多恵子

富田俊男、石田真人

制作協力：櫛SP建材エージェンシー

THE HUMAN DIMENSION FROM KOTOBUKI

モニュメント「サークル」
作家/鈴木 明
新宿区立総合体育館(東京都)



競う。観る。そして憩う空間になる。

天井レリーフ「渦巻き星雲と銀河のドラゴン」
作家/柏原えつとむ
大河原町総合体育館(宮城県)



スポーツ施設にやすらぎの^{アート}芸術。
コトブキのタウンアート事業

K・O・T・O・B・U・K・I

株式会社コトブキ

タウンアート事業部 東京都港区浜松町1-14-5 コトブキD.I.センター4F 〒105 Tel.03-3434-3042

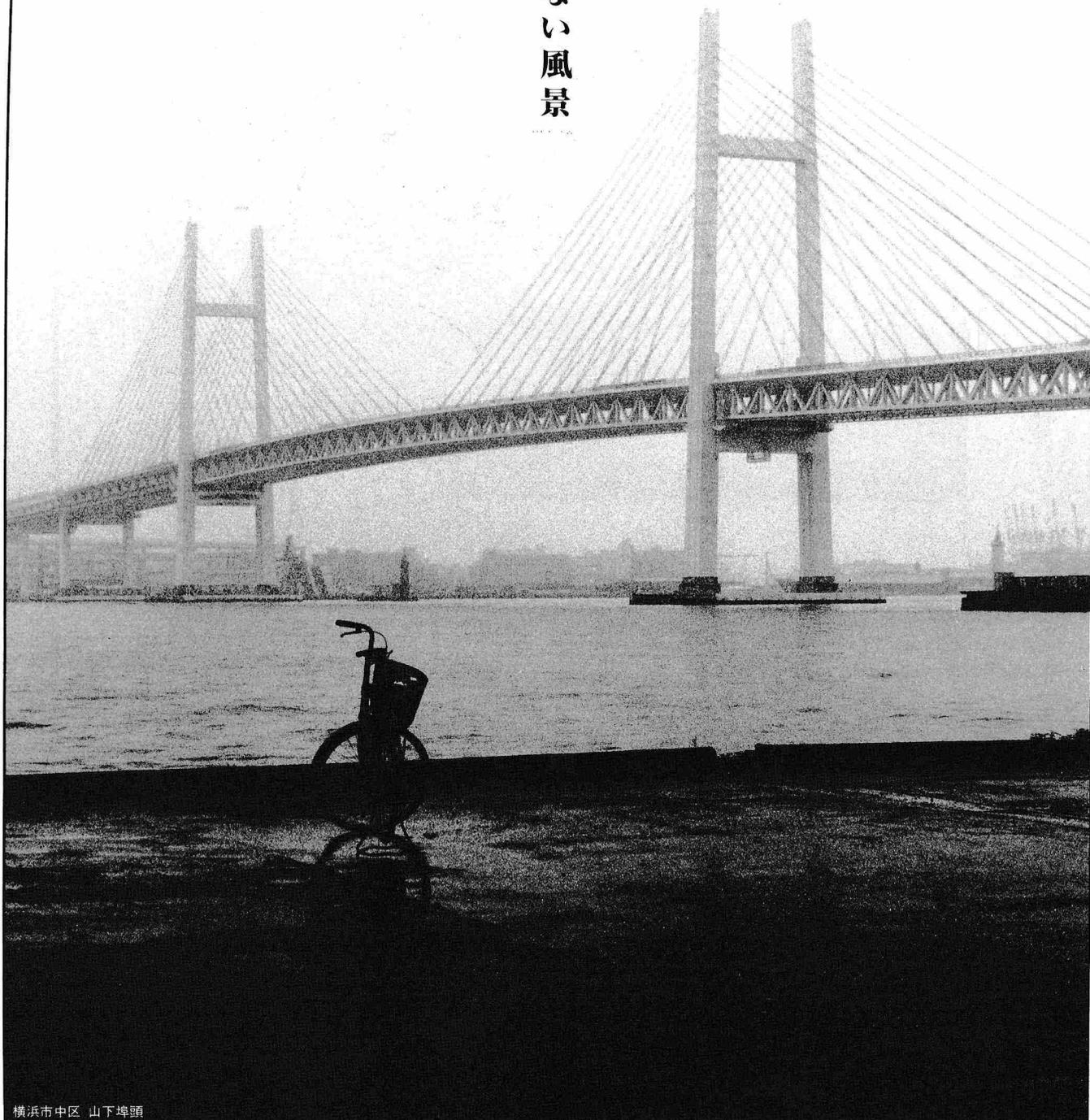
札幌011-221-3496/青森0177-43-7321/秋田0188-63-9511/盛岡0196-25-0713/東北022-284-1011/水戸0292-25-8222/北関東0286-62-7251/千葉043-275-2161/埼玉048-883-5566/
武蔵野0422-53-8221/横浜045-471-7151/新潟025-243-2216/長野0262-28-9722/静岡054-282-8792/名古屋052-773-4321/京都075-371-3221/大阪06-396-5111/金沢0762-47-7422/
神戸078-271-8585/岡山086-246-0818/高松0878-51-9140/広島082-230-1261/山梨0852-22-7511/九州092-441-0763/長崎0958-64-0102/鹿児島0992-58-2361/沖縄098-863-7803



そうです。この優美さが、INAX。

大同生命大阪本社ビル。このビルで使用されているテラコッタは、平物の他に、化粧陶板、特殊な袋状の水切、窓台役物など、その種類は実に1200形状。ビルの足元から、頂部までを優美な曲線と直線で包みこんでいます。環境美の創造と提供をめざすINAXの一つの成果がここにあります。 **いいな、INAX。**

名前のない風景

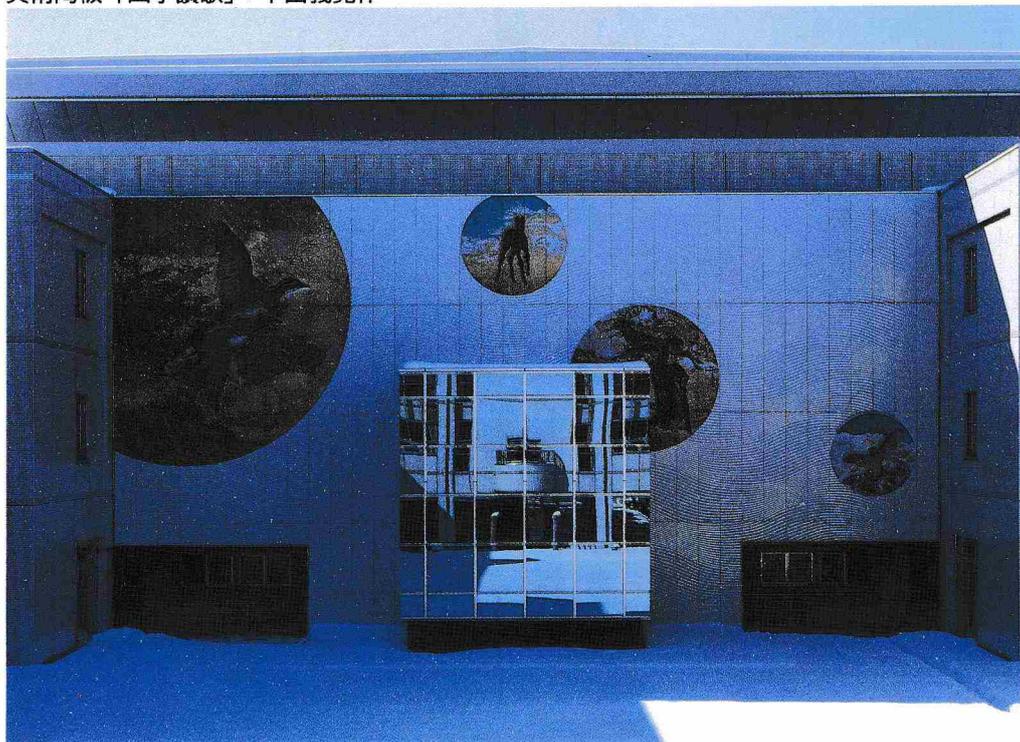


横浜市中区 山下埠頭

会えるはずもない人のことを考えている。



美術陶板「四季讃歌」：下田義寛作



インテリジェントスクール

INTELLIGENT SCHOOL

21世紀をめざした教育の展開のための特色ある施設づくり

滑川市立 滑川中学校
富山県滑川市下島

大型陶板

大塚オーミ陶業

●OTセラミック ●テラコッタ ●美術陶板

設計監理 富山県建築設計監理協同組合
監修・指導 谷口汎邦(東京工業大学名誉教授・武蔵工業大学教授)
中山和彦(筑波大学教授)
体育棟壁面・原画製作 下田義寛(日本美術院同人)
施工 フジタ・八倉巻建設・相川工業JV

東京 / 〒101 東京都千代田区神田町2-6 TEL03-5295-3555 FAX03-5295-3556
大阪 / 〒540 大阪市中央区大手道3-2-21 TEL06-943-6695 FAX06-943-6487